273
14

始

273
14

中學生諸君

高須梅溪著

東京　實業之日本社

273-14

中學生諸君

大正
1.12.6
開封

幼少にして哀別せし
地下の父母に献ず

序

學生諸君の伴侶として執筆を繼續すること十數年、而も依然として吳下の阿蒙たることを恥ぢ入ります。

けれども融通の利かない小生は、矢張、學生諸君の伴侶たることを以て清き樂みとなし、且最大の光榮として居ります。本書も亦、中學時代の諸君を相手に、私の眞實な心を打開けました。程度の上に考へ及ぼして、簡易卒直を旨と致しましたから、素より卓越した諸名士に向つて劉覽を求むべきものてありません。唯、小生は、青年諸氏の味方たるべき先輩の多くが、依然として舊式の修養訓めいた種類に安んじて居らるゝのを、見て、一種不滿の感じを惹起したので、本書には、幾分か新味を加へ、新傾向をも攝取して、之を小生一流の思想中に融和させやうと試

みました。而して全體を通じて、積極的、進取的の氣象を鼓吹したことは、聊か諸君の興奮劑にならうかと思ひます。其の他、別に申上げることはありません。謹んで之を中學生諸君の机下に捧げます。

大正元年晩秋

高須梅溪

"His atanic majesty has very little use for the youth who is bound to be somebody, to do something worth while, for he is too busy to give his time to evil. It is the aimless, the indolent, those who are without ambition, that Satan is after. He knows there is no use in wasting his time with the youth who is dead-in-earnest."

中學生諸君 目次

第一　倶樂部夜話……一

第二　愛すべき日本……七

不朽不滅の國——聖父と赤子——國家の一分子——尊き世的使命

第三　希望に輝く中學時代……一八

幸福な時代——名士の勸學法——自重の要

第四　近代思潮と自覺……二七

自由の叫び——實利的思想——反動の波——個人主義の傾向——矛盾撞着不安——現世紀の誇り

第五　青年の長所短所……三〇

人生の夏——英雄の青年時代——警戒すべき短所

第六　強き心と強き肉體……五三
悲哀の聲調——双脚を地上に著くる青年——精神力が第一——名士の心身强健法——深酷なる集中力
第七　天然美より得來る新鮮の氣分……六四
田園の風色——心身の疲勞を緩和す——平和の宇宙——偉人は如何に天然美に對せし乎——旅の趣味
第八　社交と演説と文章と……七六
社交上に於ける信用——誠實と誠實——實用文章——鮮かに浮ふ個性——哲人の書翰——經世の一機關——精神的雄辯——「誠」の心
第九　有用なる書籍……九三
暗黑を照らす知識の光——惡書の跋扈——名士の愛讀書——如何なる書が有益なるか——書籍の選擇標準——余の愛顧する名著——知識に魂を與ふもの
第十　新聞雜誌の讀み方……一〇七
廿美なる回想——社會種に對する用意——獨立せる論評——海外に於ける形勢——特に精撰せよ
第十一　文學好の青年へ……一一六
反省すべき注意點——誘惑され易き傾向——古典の價値——中毒せざる程度
第十二　英雄崇拜の利弊……一二五
平和的英雄と戰鬪的英雄——英雄崇拜は何故必要なるか——偉大なる精神生活——不滅の感化——英雄の短所——內部生命に觸れよ
第十三　天才的青年と凡才的青年……一三八
天才派の特色——凡才派の特色——天才と凡才との行末——秀才立身の法——凡才出世の捷徑——一日の油斷は一日の退步

第十四　病弱を嘆く厭世的青年へ……一四八
病弱より來る惡影響——痼疾に惱まされし偉人——健康者の弱點——病中の覺醒——精神の力を以て病氣を征服す——病を壓服せし名士——病弱者が强健となりし實例

第十五　遊蕩の空氣に憧憬るゝ學生へ……一六二
色彩と音樂の世界——青春の危機——陸落の第一歩——遊蕩者の懺悔——露骨なる感想

第十六　觀劇趣味と相撲趣味……一七三
新しい芝居——觀劇に就ての注意——一種の美觀——實力の爭ひ——惰弱の氣を一掃す——適度に樂め

第十七　無作法を咀ふ……一八三
形式美と內容美——不行儀は感情を害す——敬愛の情——禮儀正しき名士——禮儀の要點

第十八　貧乏祝福論……一九二
淸貧の趣味亡ぶ——元氣漸く鎖沈——富に對する渴望——生活難の急潮——富は絕對的幸福に非ず——黃金萬能者の夢想せざる淸福——知足の念に伴ふ心の余佑

第十九　俠骨讃美論……二〇七
人道と情味——俠者の精神——無形の報酬——史上の俠傑——人生に於ける一點紅

第二十　空想の窓より見たる實世間……二一七
社會の表面——歡樂の結晶か苦悶の幻影か——冷かなる實體——暗き一面——正義の勝利

第廿一　職業難……二二七
職業に對する迷想——職業撰擇に就ての注意點——撰擇の呼吸——長所を自覺せよ——社會に需用多き學問——落伍者となる勿れ——新職業を發見せよ

第廿二　新生面の開拓……二四一
政治家志望者へ——實業家志望者へ——文人學者志望の人々へ——教育家宗教家志望者へ——農業家志望者へ——新聞雜誌記者たらんとする人々へ——人文史上に於ける新紀元を作れ

第廿三　獨立して事業を開拓せとんする青年へ……二五六
獨立に適當な人物——人一倍の骨折——有力な無形の資本——窮境に沈む覺悟——勤儉の要——唯一の政策

第廿四　海外に赴かんとする青年へ……二六七
內地に躊躇するの不利——如何に有利なる乎——濶大の氣象——永住の精神——日本人としての欠點——如何なる方面が有望か——南半球へ

中學生諸君目次　終

中學生諸君

高須梅溪著

第一　倶樂部夜話

黄金色の稻の波、青く澄んだ高き空、爽かな空氣、之等に輕い快感を覺え乍ら、小さい校門を潜つた素樸な中年者がある。それは、△△年の秋、田舍に滯在して居た折の私の姿であつた。

私は、風雨に打たれて黑ずんだ校門を、數十回潜つた。何の爲めに？未だ一度も教師となつた事なき私が、此に來たのは、小學校の一室を借りて、其處から遠くない△△中學にある十數人の生徒諸君と、時々、談話

を交換したり、處世勤學の問題を討議する爲めてあつた。日曜と土曜は午後、他は大抵、夕刻から集つて、約一ヶ月間、親しい交際を續けた。

凡そ天下に倶樂部と號するものは、隨分、多い。都會に赴けば、何處でも、立派な善美を盡した倶樂部がある。けれども私が滯在して居た田舍には、それらしいものがなかつた。其の代り倶樂部に代用すべき小學校の一室を借りることが出來た。其處には、何等の美術的裝飾がなかつた。天井は燻り、壁は色褪めて、古きテーブル、古き椅子が淋し氣に横はつて居た。私は、敬愛する中學生諸君と、斯うした一室に會合したのである。

此の簡易な倶樂部に集る中學生諸君は、何れも眞面目な健實な人達であつた。少しも浮華虛榮の幻影に惑はされる樣な風は、見えなかつた。私は、それを第一に嬉しく感じた。殊に一段、敬服したのは、極めて謙抑なとて、先輩長上を凌がうとする慢氣が、微塵もないのであつた。私の如き極めて貧弱な浪人に對してさへ、謙抑の態度を以て臨まれたそれがために、私は、ともすると、興に乘つて放談高論した場合さへあつた。

浪人ではあるが、比較的に廣く社會の各方面に出入して、種々の趣味に接觸した私が、一生、忘れ難い愉快を覺えたのは、壯麗な紳士の邸宅に於ける宴會でもなく、華美なレストーラントに於ける佳人の舞踏でもない。古びきつた小さい田舍の倶樂部に於て、靜かな夜に唱ふ蟋蟀の聲を聞き乍ら、柔い燈光の下に、中學生諸君と顏を合せるのが、何よりの愉快であつた。此のImpressionは一生忘れ得ないであらう。

古臭い空氣の中に於て、溫和しく椅子によりかゝれる諸君の顏色は、鮮かな紅薇薔のやうに輝き、水晶の如く澄んだ眼、白百合の如く汚れぬ

唇は、程よき調和を保つて居た。其の面上には、醜惡な俗世の塵は、全然、痕跡を止めて居ないのである。私は、斯うした諸君の顏を見ることが何よりの慰めであつた。否、慰めと云ふよりも、疲勞した私の精神に涼しい元氣を吹込む原動力であつた。唯、此の靜寂の秋夜に於て、沈默したまゝ、暖い心と心との融合を感ずる丈でも、快いものであつた。私は諸君に感謝する。

私は、衰頽から急に蘇生したやうになつて、諸君に話しかけるやうになつた。餘りの快さに、訥辯な私も、吃り〳〵、何とはなしに喋つた。けれども一方に於て、敬愛するわが若き友の告白を聞くことを忘れなかつた。諸君は最初こそ此の點にも遠慮したが、禮儀を失はぬ態度を以て、種々の質問を發し、又た未來の希望や、新しい理想を話された。其の中には、種々の問題が含まれてある。之を概括して云へば、對國家、對社會の事より娛樂、趣味、讀書、交友等の事に及んで居る。中には私の貧しい知見を以て解き難い謎もあつた。此の點から云ふと、私は、多く諸君に敎へられたのである。

けれども一方に於て、曲り乍らも、淺い乍らも、眞面目な心持で私の意見を述べた問題もある。又た其の場に於て、輕々に決し難きことは、後から手紙を以て、應答したのもある。それは、私に取つて、中々興味深きことであつた。

斯うした眞面目な問題を討論した後で、番茶を飲み、鹽煎餅を囓る味は、又た格別であつた。私には、その番茶が、玉露よりも優れたものゝやうに思はれた。一片の鹽煎餅が、風月の菓子よりも旨く感じられた。他の中學生諸君も、私と同感であるやうに見えた。

又時としては、過去一歲の間に於て、卓越せる名著と認識された書を

持ちよつて、讀書會を開き各自の感想を述べる事もあつた。時としては、或神社の境内にある掛茶屋や、稻の波稻の香に包圍されて居る田園に於て、俳句會、短歌會を催ほした事もあつた。それ等の樂しさに依て、衰頽しかゝつた私の身心は、急に反撥力を有するやうに一變したかの如く感ぜられた。

以下に述べる所は當時の回顧錄である。討論した問題の歸着である。

"The aged in council, the young in action."

"Youth is a blunder, manhood a struggle, old age a regret."

第貳　愛すべき日本

諸君が試みに世界地圖を展べて、東半球を見渡されると、先づ諸君の凉しい眼に映つるのは何であらう。諸君は、無意識の間にアジアの東部に於て、弓形を爲しつゝ横はる一大列島に強い注意を向けらるゝであらう。而して何人の説明をも待たずして、それが大日本帝國の根幹であると、自ら首肯いて、一種の熱愛と懷し味とを覺えらるゝであらう然り、愛すべき日本!!!

日本は、最早、昔日の小さき日本ではない。日露戰爭に勝つて、東部アジアの一大半島(朝鮮)と南部カラフトとを新領土として、一等國の班に入つた。其の面積は四萬三千餘方里、地球上、米、清、露三國を除けば、先づ其の大いさに於て、他に讓らぬ程度にまで膨脹したのである。斯くの

如き時機の下に生れ且働きつゝある私等は、一種の誇りと頼母しさとを覺えざるを得ない。然り、愛すべき日本!!!

不朽不滅の國

諸君、私等の先輩は我日本帝國に就て多くを語つて居る。けれども獨逸の哲人チイグラアの所謂『矛循牴觸の世界』に生息せる現代人の一部は、先輩の說く所を陳套なりと斥けて了つて、之に耳を假さうとしない。却て惡時代の狂瀾中に其の一身を惑溺させようとして居る。若し正直に告白すれば、私は、必ずしも新時代の潮流に反抗しようとするものではない。又た舊時代の黴臭い空氣の倉庫中に隱れようとするものでもない。其の何れにも拘泥せずして、確信の大道を歩もうとするに過ぎない。此の立場からして、諸君を惡時代の狂瀾に溺れさせたくはない。感情的にも、歷史的にも、又た理性的にも、第一に我日本帝國の愛すべき所以を話したい。

諸君、東西兩半球を見渡して眞に不滅の國家なるものがあらうか。少くとも、過古より今日に至る迄、不滅の呼吸を續け、今後も永く之を續けて行く丈のPossibilityを有する國は何處にあるか。不滅とは其の國が他國の手に支配されざりし事を意味するのである。死滅とは、其の國が他邦に統監されしを云ふのである。斯うした意味から見ると、現に歐洲の强國として濶步するものも、大抵一度は死滅の不幸を見たのである。而してそれが或機會に依て、復活したに過ぎない。けれども我大日本は、未だ敵國の爲めに、呼吸の根を止められたことがないのである。天孫降臨以後、神武大帝の御即位から今日に至る迄、儼然として不死不滅の命脈を繼續し來つたのである。即ち我等の祖先は、斯うし

た不滅の國の光榮に浴しつゝ生活したのである。

然り、不滅の聖國とも云ふべき大日本は、日清、日露の二大戰役を經て、不滅から進んで、膨脹飛躍の活氣と光彩とを示した。其の勢力が一層、強大となるに伴うて、不滅の基礎は、益々強固となるのである。之れ日本國民が、第一の誇りではないか。

聖父と赤子

諸君諸君は、西洋地理を學ばれたであらう。而して歐洲禍亂の伏魔殿と目せらるゝ土耳古の事を知られたであらう。此の新月旗を翻へす國に於ては、人種も、宗教も非常に多種多樣で、殆ど統一が付かないのである。人種から云へば、土耳古人の他に、アルメニア人、セルブイヤ人、アルバニア人、メソポタミヤ人、ルーマニヤ人、韃靼人、歐米各國人、亞弗利加の黑人等が雜居して居る。宗教から云へば、マホメット教徒、異教徒、基督教各派（舊教徒、新教徒、猶太教徒、希臘教徒）があつて、習慣、信仰を異にして居る。此樣な風に、全然、統一和合の支障が横はつて居る爲めに、少しも生氣を復活せしめ得ぬのである。之れ主として異人種の爭ひが、最大原因となつて居る。

けれども之は、獨り土耳古にのみ見る現象でない。歐米に於ても、此の例が多い。墺匈國の如きは、其の最たるものである。匈牙利に於けるスラブ人とマグヤ人との軋轢は、甚だしい。大不列顛の下に利害を一にすべき英蘇人と愛蘭人とは、何日も祖先以來の仇敵のやうに睨み合つてるてはないか。

處が日本には、土耳古や、墺匈國に見るやうな弊害がない。建國以來、一人種を以て繼承し來つたので、一大家族の如き關係を生ずるに至つ

た。　天皇は、我等の尊信すべき君主であり、又た聖父である。臣民は、忠僕であると同時に、其の赤子である。斯うした關係が今尚繼續して居る。總べての同胞は、廣き意味に於て、兄弟である、姉妹である。之れ外患の生ずる毎に、固く一致團結して、敵に當り勝利を占得する所以である。此の美しい關係や、由來は、少しも歐米各國に見ることが出來ない。之れ我等の誇りではないか。

國家の一分子

我等は、微力ではあるが、日本の運命と終始すべき一分子である。即ち祖先が與へた大なる家を支持すべき一小支柱である。之に對して誠實を捧げ、至忠を致すことは、軈て自らの支柱たるべき力を擴大し、堅固にする所以である。私等の自由、安樂、權利は、日本と云ふ大なる家のために守られて居る。私等は、此の恩を忘却してはならぬ。

けれども母胎を出て成長した男女が、其の母の恩を忘れて了ふやうに、個人主義に中毒せる放恣な人々は、ともすると、自分を生んだ母の恩を忘れ、其の母を生んだ祖母を忘れ、而して其の遠き祖先を生んだ日本國の恩を忘れやうとする。此の點は特に注意せねばならぬ。惡時代の狂瀾に溺れて、徒らに增上慢に囚はれたものは、往々、此の傾向を示して居る。

若し之等の人々が、假りに日本を離れて、海外に出ると、此に初めて愛すべき日本の眞價を諒解するであらう。何となれば、凡そ如何なる人も、其の故郷を愛せずには居られぬ。諸君が、故郷を離れて、他に遊學せらるゝ時、四季折々の推移に伴うて、先づ故郷の風色を想起さるゝであらう。懷しき父母の俤を胸に畫かるゝであらう。之と比しく海外に

ある同胞の眼からは、日本は、其の一大故郷である。遙かに望む東洋の一大島國は、熱愛と憧憬との具體化である。其の一草一木も、夢に入つて忘れ難いであらう。今迄、其の愛すべき理由を自覺しなかつたものさへも、何とは知らず、其の一大故郷たる日本を思慕するに至るであらう。況んや一大家族の如く團結しつゝある我國に對しては、一段の愛着を生ずるのは、至當の事である。

尊き世界的使命

私等は、又た明媚な日本の山水に對して、詩的愛着と自然の誇りとを覺える。同時に日本が生んだ古來の英雄佳人に對しても、讃嘆と渇仰とを捧げる。然し之れは、一々叙說する必要がない。諸君も亦同樣の感じを持たらるゝであらう。唯、此に意味を强めて述べねばならぬのは、現代に於ける日本の尊き使命である。

我國は、其の地勢上、東洋の東端にあつて而かも西洋の西端に接して居る。從つて東西文明思潮の精髓は、自然に我國に流れ込んで融合混化されるやうになつて居る。のみならず、我國民は之を腦裡に受け入れて、充分に理解し、統合する丈の力を有する。此の事實は、支那、朝鮮の文明を咀嚼して、更らに我國の新文化を形造つた既往の歷史が、能く證明するであらう。

斯うした特質と長所とを有する我國が、東亞の覇者となつて、支那、朝鮮を化導すべき地位に起つたのは、軈て數歩を進めて、歐米各國をも、精神的に統一し、化導する地位に到着する日があらう。外形的に歐米を支配せざる迄も、內容的、思想的に歐米を導くやうになるに違いない。これ日本が當然、荷ふべき使命である。けれども現在に於ては、未だ精

神的にも、歐米に及ばぬ點もある。即ち精神的化導者たるには、充分の資格を具備して居ないやうに見える。之れ一個の最大弱點である。

諸君、諸君にして偉大なる日本の使命を自覺されたならば、一種の歡喜と感激とに打たるゝであらう。精神的に世界の王者たるべき日本を愛するの念は更らに深酷になるであらう。諸君が此の使命を委ねられた日本國に生れたのを、衷心から感謝さるるであらう。愛すべき偉大なる日本!!!

未來の日本國の運命を荷ふ諸君よ、諸君の力一つで、我國は、如何でもなるのである。之を偉大ならしむるも、豪健ならしむるも、皆諸君の努力發奮に、依る。同時に、諸君も亦此の國と共に偉大なる國民、豪健なる人物となるのである。私は、諸君と共に、此の國に生れた幸福を感謝せねばならぬ。

凡神國一世無窮之玄妙者。不可敢而窺知一矣。學二漢土三代周孔之聖經。革命之國風。深可レ加二思慮一也。

第參　希望に輝く中學時代

遠き記臆の奥底を探つて見ると、私が辿つた人生の行路に於て、若々しい希望と元氣とに輝いた時代のことが想ひ出される。それは中學の學窓にあつて、勇しく其の前途を望んだ折であつた。

小學時代から中學時代にかけては、既知の事實よりも、未知の事實が多い。其の觸目する總べての事物に新鮮な感じを喚起される。小學から進んで中學に入つた折の心持は、コロンブスが、初めて亞米利加を發見したやうに驚喜の眼を睜るてあらう。新しい中學の制服制帽、新たに接觸する教師の風采、新たに敎へらるゝ學課の數々、之等が總べて目新しく心眼に映るてあらう。見る物、聞く物、悉く滿足と喜悅と一種の誇りとを感ぜぬ物はない。少くとも私に於ては、斯うした樂しい經

驗があつた。

幸福な時代

總べて人間は、智性の滿足と共に、情感の滿足を欲する。耳目に觸るゝもの、又は耳目に遠き深奥のもの、それ等に就て知らうとするのは知性の欲求に基づく。何事も珍しい小學時代と中學時代にあつては、知性の活動が極めて旺盛である。如何なる知識の斷片をも、敬重して、之を受入れる力が強い。從つて記臆力も亦新鋭である。小學時代に比較すると、其の眼界も廣くなつて、世味の一端にも觸れるやうになるから、愉快な感じは、更らに增加するのである。私は、斯うした中學時代の回想を愛せずには居られぬ。

諸君、諸君は、今や此の中學時代に到達して、修養に餘念なき體である。

浮世の煩瑣な事象から離れて、通俗學術の一班を研究し、身躰の發達、德性の涵養に餘念がない。眞に羨しい身分である。此の時期に修め得た總べてが、諸君の精神的血液となり、諸君の內容を豐かならしめるのである。

中學時代の敎育は、必ずしも諸君に對して直ちに活用し得べき知識を與へないであらう。けれども諸君が專門に研究すべき學術又は技藝を修得する土臺を作り上げるであらう。如何なる英傑も、如何なる名士も、一度は、此の門を潛るのが多い。之を通過せずとも、立身する者はあるが、通過した者は、通過せぬ者よりも通俗學術に就て、略ぼ要領を得べき礎地が出來る。それ丈に幸福である。諸君は、此の幸福を享受しつゝある。中學に入り得ざる多くの青年は、如何に之を羨望するであらう。

名士の勤學法

けれども私は正直に告白する。中學時代は諸君の總べてではない諸君の前途には、未だ長き道が横はつて居る。中學を出て直ちに實務に當るとしても、又た中學から高等學校や、私立大學に入るにしても、尙ほ數年の修養を積むべき關所がある。幸ひにして此の關所を通過しても、更らに實世間に於ける關所が無數に扣へて居る。中學は、其の小さき關所の一である。

けれども此の小さき關所に於て、他の多くの關所を越える初步を敎へ、根抵の一部を與へるのであるから、充分に之を諒解して、活潑に應用するものは、高等學校に入るにも、公私大學に入るにも、左程の困難を感ぜぬであらう。之に就て、古來の名士が、如何に其の中學時代を過した

か。少しく回顧するのも無用ではあるまい。

英國の大政治家グラッドストンは、イートン中學に六年間居た。彼は、眞に模範學生と稱せらるべきものであつた。彼は、道義人情に背戻せる事は、如何に在來の慣習なりとて之を行はうとはしなかつた。能く運動し、能く讀書し、雄辯を練ることを怠らなかつた。イートン討論會の花形「イートン雜誌」の世話人としての彼は、早くも其の大なる未來に囑望された。又希臘、拉典の古文辭に就て能く難解の辭句を解釋する力が比較的に多かつたと傳へられて居る。

米國大統領の一人であつたガーフキールドも亦、其の中學時代を健全に送つた。彼は粗衣粗食に甘んじて、一生懸命に勉强した。彼を喜ばしたのは、校内にある小圖書室であつた。其處には、僅かに百五十部ばかりの書籍を藏するに過ぎなかつたが、彼は、貪るやうにして、手當り次第に讀破した。「ヘンリー、シー、ライトの生涯」と題する冊子は、彼をして一時、禁欲的生活を決行せしむる程の感化を與へた相てある。彼は、總べての學科のみならず、演說、文章に於ても亦、何日の間にか儕輩を拔くに至つたと傳へられて居る。

大學生として亂暴者の隨一に數へられ、讀書、決鬪、飲酒を事としたビスマークも、其の中學時代は、眞面目に勉强したと見えて、學業優等證を握つて、校門を出た。

之等は、名士の中學時代の一端を擧げたに過ぎない。然し彼等が、中學時代に於て、慥かに其の素地を築くに努力したことは明白である。或は體育に得る所があるか、修身に得る所があるか、何れかを握つて居る。何の爲す事もなく、ウカ〳〵過したものは、僅少の除外例であらう。此の點から見れば、中學時代に於ける學生の行動如何に依て、其の未來

の運命をトすることは、困難でない。此の時代は、それ程、諸君に取つて大切である。

自重の要

諸君、私は敢て諸君の小心翼々たることを望まない。畏縮することを欲しない。諸君は何處迄も無邪氣で快活でありたい。唯將來花も實もあることを覺悟して、自重していたゞきたいと思ふばかりである。何となれば諸君の中から、未來の宰相も出る、文豪も出る、英傑も出る、大教育家、大哲學者、大實業家も出るであらう。假令、諸君の總べてが貴紳となり、名士とならずも、將來、我國の中流階級を組織すべきは明かである。一國の盛衰は、中流階級の盛衰に依て、如何にもなる。若し諸君が中學時代に剛健なる心身の土臺を築き上げて置くならば、我國の未來は、歡喜と榮光とを以て滿さるゝであらう。これ諸君の自重を要する所以である。

それにつけても、私は、諸君の前に懺悔すべきことがある。無爲懶惰な私は、生涯の中で最貴い中學時代を回顧する毎に、何とも云へぬ懷しさと、深き〳〵哀愁とを感ずる。私は、平和にのみ馴れて我儘に中學時代を送つた。それがために專門の學校に這入つてから、非常に苦みぬいた。懶惰なる結果は、少からず私の專攻學術の支障となつて現はれた。けれども其時になつて、急に狼狽したとて、後の祭である。鋭敏な中學時代のやうに總べてを覺え込むことが出來ぬのである。此の一點に想到する毎に、私は大切な時期を空費した事を嘆息せずには居られぬ。諸君は、失敗した私の後を追はずにグラッドストンのやうな充實した生活を續けて、快く校門を出ていたゞきたいと願ふのである。

My heart leaps up when I behold
　　A rainbow in the sky:
So was it when my life began;
So it is now I am a man;
So be it when I shall grow old,
　　Or let me die!
The child is father of the man;
And I could wish my days to be
Bound each to each by natural piety.

—Wordsworth.

第四　近代思潮と自覺

現代は、我國の文明史を裝飾するに充分なる材料を持つて居る。社會一切の人文は、二三十年間に驚嘆するばかりの進歩を示した。此の意味から云へば、私等は、現代を謳歌せねばならぬ。けれども此に一個の不思議がある。それは、青年社會の或部分に、暗愁の色が漂うて居る事である。彼等の沈鬱は、何の爲めか、反抗は何のためか、疑惑は何のためか。之れ一個の不思議！

此に至ると、私は、現代を讃美しては居られない。青年諸君の憂ひは、私の憂ひである。諸君の嘆きは、私の嘆きである。諸君の憤りは、私の憤りである。私は諸君と苦樂を一にしたい。それには、右のやうな不思議なる現象が、如何なる事情に原因して居るかを探究しなくてはな

らない、それを押しつめて行くと、結局、如何な結果に到達するてあらうか。

自由の叫び

現代青年の苦悶、疑惑は、主として時代思潮の動搖、激變に根ざして居る。維新以前迄は、國學者流、漢學者流の思想に依て支配され、或は佛教、神道に依て指導されて居た。其の間、多少の衝突があつたにしても、根本的に動搖することがなかつた。多くの青年は治國平天下を理想として、一直線に邁進するを得た。幕末に及んで、死生の巷に出入しても、精神上に於ける信念には、些の動搖を來さなかつた。彼等は、肉體を苦め、心を苦めたに關らず、毫も矛盾撞着の苦悶に包圍さるゝことがないのてあつた。

けれども王政維新と共に時代の舞台は一轉した。從來、未だ觸れたこともない西歐思潮は、時を得たと云はぬばかりに、ドッと押寄せた。而も其の勢は、頗る猛烈てあつた。先づ同胞の夢を驚かしたのは、自由主義、實利主義の思想てある。自由主義は、十八世末の歐洲に生れた思想て、其の鼓吹者は、ルーソー、モンテスキユー、ヴオルテール等てある從つて佛蘭西が中心のやうに見做されたが、元來、イギリスの思潮、感化に基づくのてある。唯、簡潔明晰な佛文が、革新思想を傳波するに有力なため、殊に佛蘭西に旺盛となつたのてある。其の結果、佛蘭西ては、恐しい大革命を生じ、舊制度の一切を顚覆して自由思想の漲るを見た。我國ては、板垣、中江諸氏が主として之を主張して、四民平等、民權擴張を叫んだ。福澤翁の「西洋事情」の卷首にある題言「四海一家、五族兄弟」と云ふ文字も亦、自由思想を普及するに大なる力があつた。而して其の記事の中には、佛蘭西革命の餘波に就て述べたものがあつた。中村敬宇

翁の「自由の理」の如きも、極めて平明に自由思想の如何なるものなるかを敎へた。日本國民は、之等に依て、自由の意義を知り、四民平等、民權擴張の必要を悟るに至つたのである。之れ思想上、社會上に於ける一大變化であつた。

實利的思想

自由主義の他に、實利主義が唱へられたが、其の Influence は相當に大なるものであつた。此の主義の宣傳者は、慶應義塾から出た。彼等は、空論を排し、壯語を斥けて、物質的文明の進歩を計らうと努力した。之がために武士道の氣風を一變して、功利的、拜金主義の傾向を招致したが、一方に於ては、實業の伸張をなすに與つて力があつた。之れも社會上思想上の一大變化であつた。

之等自由主義と實利主義の影響は、今日迄波及して居るのである。而して當時にあつては、此の思想に反抗するものは、時代遲れとして、排斥されたのである。從來の思想は、一時、其の痕跡を潛めたかのやうな有樣に見えた。即ち新しく輸入された歐洲思潮のために、我思想界の色彩は、全然、一變したのである。之れ我國人文史上に於ける一大轉機であつた。

けれども我國固有の思想は、全く亡びて了つたのではない。唯、影を潛めたに過ぎぬ。其の形は、何等かの方面に現はれねば止まぬやうに思はれた。

反動の波

反動の大波は來つた。

從來、忠君愛國、治國平天下の思想以外に何とも考へなかつた人々は新輸入の西歐思潮に驚きの眼を睜つて、一部の保守派が反抗の氣勢を示しても、それを振かへるものが少かつた。唯、新時代の勢の赴く所、滔々として底止する由がなかつた。汽車、汽船、電信、電氣、石油等の新文明の物質的表象が、帝都に光彩を放つやうになつた。伊藤、井上兩氏の歐化政畧より來る鹿鳴館の舞踏や、英佛の禮法は、保守派の眼には、全く異樣に見えた。所謂舶來品（歐米の事物）は、一も二もなく歡迎せられ、重寶がられたが、我國の事物は、却て輕侮せらるゝやうの傾向さへあつた。時代は、總べて西洋心酔の渦中に沒入したやうてあつた。其處には、利と共に不利をも伴ふた。之れ反動の大波が起つた原因てある。

反動の旗に印された文字は國粹保存主義てあつた。此の派の人々は、歐洲文明が單に物質方面に偏して、精神の領域に及ばぬことを說いた。日本には、固有の武士道がある。忠君愛國の思想がある。それに何も精神方面にまて西洋崇拜の餘弊を及ぼすに及ばぬ。斯う云ふ風に主張されたのてある。此の論者の中には、日本主義や、帝國主義を唱へるものもあつた。之等は、多少、醉へるが如き人々に反省の冷水を浴びせたのてある。高山樗牛氏の如きも、一時、日本主義の謳歌者となつて此の主義から文藝を批評した時代があつた。之等國粹主義が、思想界に影響を與へたことも認めねばならぬ。

最初、國粹主義が唱へられた時は、之に對して反對した急進主義の人々もあつた。或は世界主義なるものを唱へた人々もあつた。多少の葛藤を經た後、何日しか時勢の推移と共に兩者の融合を見るに至つた。之れ思想上の變調をほのめかす先驅とも思はれた。

個人主義の傾向

反動は又た反動を生んだ。

同胞が、沒我、殉國を信じつゝある間に、個人主義の思想が輸入された。此の先驅者は、獨逸にあつて、新道德を唱へ、現代文明に精神的爆裂彈を投じたニイチエである。ニイチエは、人間を二つに分けて、支配者、被支配者となし、前者は、古來の有名な帝王、豪傑(シイザア、ナポレオン一世)で彼等は利己的個人的の能力を、出來る限り、發展し擴張させて身心二面に於て、個人の偉大なることを示した。斯うした人々のために、人は向上進歩するのである。然し被支配者も亦一旦、自己の能力を自覺し、自己の强大を信ずるやうになれば、「超人」又は「超人」に近いものとなれると敎へたのである。赤門一派の文士は、此の思想に動されて、ニイチエ?ニズムを唱へるに至つたのが、抑も我國に個人主義が明かに取り入れられた最初であつたらう。

ニイチエの個人主義は、必竟、ビスマークの國家社會主義に反抗して起つたのである。ビ公の政策を行はざる以前は、獨逸にも、ヘエゲル、カント、フイヒテ、シエリング等が現はれて、思想界を賑はしたが、ビ公の政策が行はるゝに及んで、大學の諸敎授迄が、國家社會主義を奉じて、平板單調な色彩を帶び、沒個人的となつて了つた。ニイチエは、之を咒詛したのである。

此の個人主義が、我國に入ると共に、感染し易い一部の青年を動かして、彼等は、極めて自意識强く、自我の念著しきものと變つて了つた。之れ從來我國に見られぬ現象で、或學者等は、極力之を撲滅しようとして、反抗の氣焰を揚げたのである。此に於て、兩派の爭を惹起したが、何日

の間にか、個人主義は、深く詩人文士及び青年の一部に浸染して、我國の思想界は、全く根底から動搖するに至つた。それ以後の事は、最近に屬するから此に說く迄もない。要するに如上の思想から醒まされ、影響され、加ふるに哲學上に於けるプラグマチズム、文藝上に於けるナチュラリズムの興起を見るに及んで、又た更らに一變したのである。

矛盾、撞着、不安

思想界の變化の激甚なるに伴ひ、科學の進步に影響されて、從來の宗教、道德なるものは、根底から顚覆されて了つた。それに對して、新道德、新宗教が唱へられぬではない。けれども全然、これを信奉することは出來ぬ。ニイチエ、トルストイ、ショペンハウエル、オイケン等の唱ふる所に全然服從するものは、少數に過ぎない。其の多くは、懷疑の暗雲に包まれ、批評的の眼を鋭くして、四邊を見廻はしつゝある。而かも種々の說が續々現はれて、殆んど之を點檢するさへ煩はしい位である。矛盾撞着の時代、動搖不安の時代、之れ過渡期の今日に於て、到底、免れ得ぬ災厄である。

現代の思想界を見渡すと、一方には、法則を重んずるClassicismと、他方には、新意を表現せんとするRomanticismがある。右には美に憧憬るゝ耽美主義あれば、他方には、人生の暗黑面を摘發せんとする自然主義がある。社會を英雄化せんとするものあれば、又た凡人化せんとするものがある。極端に國權を主張せんとするものあれば、又た別に人道主義を唱ふるものがある。全然、矛盾撞着の有樣である。斯うなると、何處に適歸すべきか、誰しも判斷に迷はねばならぬ。

私は曾て此の點に就て嘆息したことがある。「現代の青年の苦惱の

原因は、如何なる道を行くべきか」に思ひ及ぼした爲めてある。即ち其の行くべき道は、到底、定めることが出來ない。前途を望むと、目標も燈明臺も見えず、淋しく暗澹たる嵐の海を航海するに比しい感があるてはないか。諸君の暗愁、疑惑、反抗は、主として、此に根ざして居るらしいけれども如何する譯にも行かない。此の間の消息に通じた先輩さへも、矢張、苦悶して居るのてある。

現世紀の誇り

解決は容易に出來ない。

私は、唯斯く正直に叫はざるを得ない。けれども之がために絶望に陷る必要はあるまい。何となれば見樣によつては、却て誇りとすべきものがある。即ち現代社會に於ける內容は、過古の如何なる世紀に比しても、劣ることなき豐富、複雜、深酷を示して居る。優秀なる知情意の精粹、結晶は、此に悉く展開されたのてある。我等は、之を眼前に眺め、且研究し得る悅樂を享受したのてある。從つて熱誠眞摯の精神を以て、一切を理解し、融合して、或何物かを獲得することに努力しやうてはないか。徒らに一時の疑惑、失望に囚へられて、精神的にも、肉體的にも、墮落するのは殘念てある。諸君、御互ゐに突進しよう。何處迄も——

第五　青年の長所短所

敬愛するN君、

秋の田園にあつて、静かにエマーソンの論集に親み、ニイチエの狂想を味ふ御身の境遇を羨む。私は、唯日毎に押寄せる俗務に包圍されて、それを處理する事にのみ心を奪ばれて居る。高く澄み渡つた秋の空を仰ぐ時、不圖覺醒の光が、胸裡を照すこともあるが、直ぐに消え去るのを悲む。

N君、

御身の書信の中に、青年に對する所感――長所短所――を聞かせよとある。私は、到底、それに答へる丈の透徹した考へがない。けれども窃かに御身に向つて淺き考への一端を洩すことを許されるならば、直截に語りたい。

N君、

青年！此の二字は、私の耳に若々しい快活な響きを傳へる。何時如何なる時も、此の響きに醒されると、急に元氣を回復する。其の位に此の二字に對して深い懐し味を持つて居る。私は、壯年の境地に足を踏み込んでは居るが、矢張、青年の仲間入りをして居たい。少くとも、現世に居る間は、如何に老人になつても、青年らしい心持を維持してゆきたいのである。青年！私は、此の二字に愛着する。

人生の夏

N君、

青年の特色、長所は、何處にあるか。私はそれを語りたい。若し青年

時代を季節に喩へると、夏に近いてあらう。快活な水々しい綠色は、青年のSymbolである。銀色に輝く眞晝の鮮かな光は、明るい青年の前途である。湧いてはくづれ、くづれては湧く壯大な雲の峰は鬱勃たる青年の元氣である。時折、電光の閃きと共に射下す白雨の箭は、青年が所信のために戰ふ勇しさをほのめかすやうである。御身は、即ち夏の氣分を有する一人である。

夏をSymbolとすべき青年は、總べてに於て冬をSymbolとすべき老ひたる人々とは、反對の傾向を示す。青年は、保守に對して進歩を唱へ、停滯に對して活動を唱へ、固陋に對して快濶を唱へる。彼は即ち進歩の味方、活動の伴侶、快濶の兒である。彼の頭腦は、總べて古きものを喜ばない。古きくすんだ色合は、彼の注意に價しない。彼の求むる所は、新奇である。或は清新である。之れ老ひたる人々の咒詛するところである。

青年が新しいものを喜ぶのは、感受性が未だ疲勞せずに鋭敏に働くからである。文學美術又は政治、宗教、哲學等に就て、何等か新しいものを提唱するものがあれば、其の新味を第一に心讀するのは、青年である彼の心には、少しも先入的の固定した考へや、思想がない。假令、あつても、それが根强く枝葉を張つては居らぬのである。又た批評的の見方をしても、眞に價値ある新しいものは、直ぐに受入れて、更らに反撥する丈の鮮かな力を有して居る。何時如何なる場合にも、新運動に與みして、之を完成させるのは、青年の一團である。彼等が其の先驅者となる。斯うした點から云へば古き建物を破壞すると同時に、新しいものを建築する使命を有するかの如くに見える。

N君、

青年の長所として尙ほ擧ぐべきは、其の俗世の汚塵に困憊せぬ心身から、不斷の精力を發揮して止まぬ事であらう。社會に於ける中年者の敗北した痕を見ると、多くは、生活のために餘義なく奔走に日を送つて、次第に心身の疲勞を生じ、未だ老境に入らぬ前に、精力の欠乏を告げるものが多い。其の人に對しては、氣の毒であるが、凡そこれ程、心細いことはあるまい。斯うなれば、若き希望の日を回想して、强ゐて復活しようとしても、最早如何することも出來ぬのである。恰度、油の盡き初めた機械のやうに、寸抄毎に運轉する力が、稀薄になつて行くのである。青年は、新しい舶來の機械に、充分、有効な油を注いだやうなものである之を運轉するに當つて、精力の充實を示すであらう。故に青年が進歩の味方として、新運動に參加すれば、新鮮な精力を縱橫に發揮して、一瞬間に舊文明舊思想を顚覆し、新文明、新思潮を波及し得るのである。青年は、强き精力の權化である。

英雄の青年時代

N君、

私は、史上の英俊が、其の青年時代に如何な仕事をしたかに就て話したい。事實の背景を有する斷案は、正確である。多くの人文史は、大抵青年の活動を記錄するノートのやうなものである。唯、此に注意を要することは、現代の青年と昔の青年とは、全然、社會的狀態を異にする一點である。昔の青年には、就職難、受驗難、事業難が比較的に少かつた。現代の青年には、此の難が蛇のやうに執念深く付き纏うて居る。それ丈現代の青年は、爲り難い。昔の青年が活動したやうに、思ふ存分に出來ぬかも知れぬ。又た二十歲前後から活動を開始することは、時勢と

境遇とが許さぬ場合が多い。けれども昔の青年が爲した所の成績を現はし得ぬ事はあるまい。溢るゝ勇氣を以て困難を征服せしめよ。御身は此の言に首肯くてあらうと思ふ。

N君、

私は、傳記を熱愛する一人である。古來、名士の生涯を觀察すると青年時代に特色を發揮したものが多い。今から十七年前、「ピット傳」を讀んだ時、私は、如何に驚いたてあらう。彼は十九歳にして父に別れ、爾來、品行德操を磨いて、狀師となり、二十一歳に及んで、アップルビーの撰擧區に於て勝利を占め、下院の一議席を占めた。而してボルクの財政革新案に贊成して、處女演說を試みた時、ボルクをして「彼は雄偉な大ピット(ピットの父)に讓らぬ老成の風がある」と嘆稱せしめた。次いてフォックスの英米講和の動議に贊同の意を表した演說をなすに至つて、白面の一書生は、忽ち飛躍して、雄辯家の名を博して、下院の一異彩となつた。之れ既に驚くべき働きである。のみならず、彼は廿三歳て大藏大臣に擧げられ、廿四歳て大英國の首相となつた。即ち私等が未だ學窓て、齷齪して居る頃に、ピットは、一國の運命を双肩に負うて活動したのてある。

米國の人傑ルーズベルトは、二十二歳にして、ハーバード大學を出た。彼が在校の時は唯、體育にのみ力を盡したばかりてなく、又た讀書にも熱中して、廣き趣味と、政法經濟の智識を蘊蓄するに熱心であつた。學校を出ると間もなく、歐洲を巡遊して、アルプスの絶巔に攀ぢ、ラインの清流に詩思を惹起しつゝ、充分の鋭氣を養つて皈つた。而して一八八一年秋、紐育市の第二十一區から出て、州議員の候補を爭ひ、一擧敵手を斃して、議會の一員となつた。之れ彼が二十四歳の時てある。彼は能

く動き、能く喋つた。腐敗政治に對して熱罵冷嘲を加へた。之がために、彼の存在を認識されて、二十五歳には、共和黨側の議長候補者に推された位である。唯、彼は其の先輩エドモンドを大統領候補者に押し立てるに當つて、充分、盡力しなかつたと噂されて、一時、人望を失つたが、兎も角も、市政の刷新に努力した一點は、後年、彼の雄飛をなすべき土臺となつたのである。其の地位の高下は、別として、彼の爲した所は、決してビットに讓らぬのである。斯う云ふ風の實例は、無數にある。

▲マコーレーが「ミルトン論」を「エデンバラ評論」に寄せて、評論壇に新風味を加へた時は廿五歳。

▲尾崎紅葉が「色懺悔」を出して、小說の一新體を開いたのは、二十三歳の時。

▲俳界の革新を企てゝ、其の曙光を認めた時、正岡子規は二十六歳であつた。

▲伊太利三傑の一人マッチニが、青年イタリア黨を組織して、自由、平等、仁愛を提唱したのは、二十二歳。

▲英佛兩國が、其の殖民地の境界線が判明せぬため相爭ふた時、之が談判の衝に當つたワシントン(米國最初の大統領)は僅かに二十三歳であつた。而して其の使命を恥かしめなかつた。

▲ラスキンが、ターナーを辯護するために出した「近世畫人」は、美術界革新の叫びとして、大きい反響を喚起したが、其の時、彼は二十三歳であつた。

之等の實例は、私の斷案の背景として、鮮かに御身の眼に映るであらうと思ふ。

警戒すべき短所

N君、

私は青年の味方として、青年を謳歌した。それと共に、忌憚なく其の短所に就て一言することを許されたい。私は、唯、諂辭のみを呈することを欲しないのである。

青年の短所は、其の熾烈な感情の動く儘に躁急となり、輕佻となつて、妄進するにある。清新を好む所から、時には、無意味な新奇に傾投して、それに全力を注ぐやうなことがある。奇矯な言論や、淺薄な煽動的言辭に動かされて、前後を忘却して了ふやうなことがある。明治初年から二十年頃迄は、斯うした犧牲になつた青年が少くない。而かもそれ等の青年は、相當に怜悧な敏慧なものであつた。而かも其の長は、やがて短となつて、自ら亡ぶやうになつたのである。即ち其の鋭く強いところが却て自分を轉覆する蔑になる。御身は此の點に就て自重さるゝであらう。けれども注意までに直言する。

色慾の誘惑！

之れも亦青年時代の恐しい蔑である。此の事に就ては、今、詳しく云ふ必要がない。一種の生理的狀態に基づくのであるから、之を無理に抑壓することが出來ない。我國に於て色情教育や、男女交際論が、喧しく云はれたのも、此に原因して居る。私は、固陋な一部の學者に雷同して、一概に色慾を排しようとはしない。けれども青年時代に於て、一番誘惑され易い惡の花は、之である。御身は體育にも熱心であるし、演說討論、讀書に忙しいやうであるから、鋭氣を他に放散することが出來て、色慾の毒の花に近付く機會を見出さぬことと信ずる。總べての中學

生は、御身の如く、絶えず活動さへすれば、誘惑の空氣から遠ざかり得るであらう。此の點に就ては別に改めて申送る折があるかも知れない今日は之で擱筆する。失敬。

"Self-help is the only help that will make strong, vigorous lives.
Self-reliance is a great educator and early poverty a good teacher"

第六　强き心と强き肉體

畏敬する先輩に逢ふ毎に、現代學生に對する批難を聞くことがある。それは如何な點か。

彼等は意志が弱い。

彼等は優柔である。

彼等は極端な利己主義に囚はれて居る。

彼等は徒らに生の不安を叫んで居る。

斯う云ふのである。私は、事實に符合するか如何か、此に判斷する譯に行かない。けれども學生の一部に於て、左樣した空氣を漂せつゝあることは、蔽ふべくもあらぬ次第である。然しそれを以て、或先輩の如く、一概に罵り去るのは、如何なものであらう。過渡の惡時代の大波に

搖られつゝある學生が、全然、其の圈外に逸し去り能はざる以上は、其の弱點も亦、彼等の所爲のみに基づくのではない。私は、此の點に向つて深い同情を寄せる一人である。

悲哀の聲調

私は、或書肆の若き主人から斯う云ふ話を聞いた。主人は、現代文學の愛好者である。彼は、小說や、文學雜誌に親んだ結果、一時、現代の學生は、悉くニヒリズムを奉ずるやうになつたのではあるまいかと推測して見た。乃て彼は、其の店頭を訪づれる多くの學生と語つて、それとなく彼等の思潮を探つた。處が彼の推想なるものは、一種の白日夢に過ぎなかつた。學生の大半は、寧ろニヒリズムの呪咀者であつて、殘る少數の者が、之を信奉することが分明つた。而してそれ等は若き文學の憧憬者で、先輩の文學論にかぶれて、ニヒリストらしくなつたに過ぎなかつた。書肆の主人が、斯う話した時、私は、心から多くの學生のために喜んだ。

或種の文學者は、常に生の不安を叫び、心內の苦悶を口にして止まない。彼等の書いた述作の多くは、暗い灰色を以て蔽はれて居る。又た左樣した思潮を、他に傳へて、多少の影響を及ぼしつゝある。勿論、其の中には、衷心から左樣感ずるものもあらう。或は、外國文學の感化を受けて、自ら其の口眞似をして何とも思はぬのもあらう。然し何れにしても或種の影響を殘すことは確かである。

文學好きの學生は、自分より幾分か進んだ先輩が、新味を帶びた悲哀の聲調を洩すのを見て、自分も亦之に倣はうとする傾向を免れない。又た左樣することを以て、近代人の本務であるかの如く思惟する。邪

念なく、猜疑なきウブな心を持つ人々にあつては、之れ又た止むを得ぬ現象であらう。斯うした學生の手になつた創作、評論は、何時も、暗い灰色の氣分に包まれて居る。實際、人生のドン底をも覗かずに、早くも生の不安を叫び、社會に向つて弱き反抗の聲を揚げる。其の云ふところは、强い根柢がありさうにも思はれぬ。けれども時代思潮の渦卷に搖られつゝある以上、一概に之を罵り去ることは出來ない。されば、とて感服もされない。學生の中に、斯うした一團が存するのは事實である

双脚を地上に着くる青年

他の一方を見ると、多少の懷疑的、批評的氣分に包まれ乍らも、別に文學者かぶれのせぬ大團隊がある。此の一團は、必ずしも生の不安を叫ばない、暗き人生を咀はない。勿論過渡時代の風潮に惱み乍らも、シカと双脚を地上に付けて、割合に健實に進み行かうとして居る。或新しい文學者をして云はしむれば、「月並式」と冷笑するかも知れないが、一國の元氣は、此の一團に依て、維持さるゝものと見做さねばならぬ。彼等の意志は、左程弱くないであらう。心身も亦優柔でなからう。或場合には、相當に大事に堪へる丈の素養も積み得るであらう。私は、此の一團に向つて特に囑望する所が多い。

所詮、文藝に關係すること深きものは、主として精神界の苦悶、葛藤を味ふ必然の機會に逢ふことがあるから、文學志望の學生に向つては、所謂「月並式」を强ゐることが出來ないかも知れぬ。少くとも、其の言論、述作の範圍に於て——

けれども文士の一部を除くと、平生言說するやうに、行爲の上にまで、平凡を打破りつゝある者があるか如何かは疑問である。有力な文士

の多くは、寧ろ行爲の上では『月並式』を追ひつゝある。唯、文學志望の學生が皮相的に揣摩して、行爲上にも『非月並式』を發揮するかのやうに思ふがために、ともすれば、豫想せぬ谷底に轉げ落ちるのである。若し此の一點に醒覺すれば、前途の光明を望み得るに相違ない。私は、此の一團にも、絶望的ではないのである。

總べての學生諸君、私は、思はず一種の冗言を臚列した。けれどもそれは、自然の勢に驅られて、心の底を打開けたのである。

精神力が第一

若し私をして直言せしむれば、諸君は、年一年、心身の剛健を計ることが、何よりも必要である。强健なる身體、健剛な精神、之に鞭つて進まれたい。私は何日も自分の弱き心身の缺陷を咀つて居る。心の戰ひに敗れ、身體の活動も亦思ふやうにならない。一種社會上の落伍者として、强者の驥尾に付かねばならぬのを嘆息して居る。私は、自分の弱きことを自覺する丈に、一層、諸君の强からんことを希望する。

强き心と强き肉體！

此の武器を有するものは、學窓にあつても、又た校門を出ても、必度頭角を現はし得るであらう。殊に强き心が第一である。精神力の剛健なるものは、假令、肉體が多少弱くとも、之に打克つて、執着强く、深酷に自分の目ざす所に進み得るのである。若し之に加ふるに强健な肉體があれば、其の目的を貫き得ぬ譯はない。

歐米の學生は、主として此の强き精神と肉體とを作るため、始終、努力することを怠らない。私は、歐米學生氣質を研究したことがある。總じて彼等は、心身の鍛錬を併行的に實行しつゝある。心の糧のみに傾

倒して、肉の糧を忘れやうとはしない。英國に於けるイートン及びハロー中學の如きは、特に此の點に周到な注意を拂つて、學生をして自動的に其の心身を强健ならしめやうと力めて居る。

名士の心身强健法

私は、此に名士の學生時代に於ける心身修養の實例を擧げたい。

▲英國首相アスキスは其の在校中、讀書に依て心の糧を得、又た乘馬に依て、肉體を鍛えた。

▲佛國大統領ファリエールは、學生時代に山野の跋渉、野外の遊戯に熱中した。彼は之に依て頑健な體格を得た。

▲歴史小説家スコットは、讀書に耽溺する程に勉强したが、又た時々旅行を試みて、健康を保持した。

▲小説家ホーソルンは、規則正しき生活を送つて居た。午前書見、午後は創作、夕刻から海岸逍遙。之が學生時分の日課であつた。

▲クロムウエル（英國の偉傑）は、蹲鞠、打棒に依て身を鍛え、ラテン語を勉强して文雅の素を養つた。

彼等は、斯くして心身を鍛錬した爲めに、壯年時代に入つて、事業を完成したのである。

深酷なる集中力

諸君、諸君が哲學を研究するにも、文學を修むるにも、政治經濟を學ぶにも、第一に必要なのは、何處迄は之に執着して、深酷に其のドン底迄見きはめることとてある。其の氣力、精神を集中するに當つて、徒らに散漫となり、淺薄に流れると、中途に挫折して了ふ。精神も肉體も共に弱き

ものは、ともすると、此の弊に陷るのである。若し心身剛健であつて、如何な障害に逢つても、ビクともしなければ、自然、其の志す所に執着して深酷な講究が出來る。彼の偏つた文藝の誘惑に逢つて、皮相な厭世悲觀に墮して尙醒めざるものは、致方がないが、それ以外にあるものは自己の努力如何によつて、强健なる心身を築き上げ得るのである。而して過渡時代の渦卷の中に揉まれつゝ、之に感染せずに濟むのである。諸君は、如何しても、此迄漕ぎ付けねばならない。之れ諸君が、志を得る捷徑であるまいか。

未だ人生の一角にも觸れないで、悲哀を叫び、心の苦悶を深酷に經驗せずに、生の不安を唱ふるものは、同情に價しても、全然、首肯き兼ぬるのである。

"Don't brood over the past, or dream of the future, but use the instant and get your lesson from the hour.

第七　天然美より得る新鮮の氣分

S君、

御身が故郷から寄せられた「天然美論」は有益に拜誦した。御身が敬虔の心を以て、此の天然に對せられることは、至極同感である。私も、此の點に就て、乏しい思想を記したことがある。それは何處にも發表せずに、筐底に潜めてある。今、不圖、其の事を思ひ出したので、寸暇を善用して、御身に迄、寫して送ることにした。それは、左の通りである。

田園の風色

田園文學から一歩、進んで Stammescharakter（種族的特色）を發揮した鄕土藝術に就て、フリッツ、リエンハルトや、アドルフ、パルテルス等は、推讃の意味を表明して居るか、ルブリンスキーは、之に反對して「鄕土藝術派は、文明の弊害に恐怖を抱いて、安全な隱場所に逃避する意志の弱い者共である」と批難した。成程、鄕土藝術派には、斯うした弱點の存する事は、明白である。けれども私は、矢張、グスタフ、フレンセン等の鄕土藝術を愛する。其處には、清新潑溂な天然美の描寫を見出すからである。

私は、繁雜な都會生活を咀はうとするものでない。都會には、又たそれ丈の長所がある。進歩した物質文明の精華、最新の藝術、學問の粹は悉く都會にある。事業を試み、技藝學術を修得するには、都會に居住せねばならぬ。此の意味に於て、私は、長い間、東京の片隅に生活して居る。

けれども都會の短所に就て、折々嫌惡の情を惹起すことがある。汚れた空氣、騷がしい電車、自働車、舞ひ颺る砂塵、絶間なき種々の雜音、煩瑣なる社交、之等は、特に私を惱ますのである。此の時、私は、天然美の畫圖

が快く展開されつゝある田園の風光に憧憬れざるを得ない。靜かな優しい郊外の趣を懷しむ心持となるのである。

然しそれは、私のみに限らない。都會にある學生諸君は、讀書研學に身心の疲勞倦怠を感ずる時、靜かに元氣を回復すべき必要を感ずるに相違ない。之を慰むるには、種々の方法がある。其の中、重要な樂みは、天然美に接觸することであらうと思ふ。其處には、健康と清福とがある、飾らざる新しい藝術の香がある。

心身の疲勞を緩和す

一體、我同胞は、昔から天然美に對して特殊の興味を感じて、自己の心身を慰めた。其の實例は澤山にある。芭蕉や、西行のごとき詩人は其の生涯を一貫して、天然美を謳歌したが、又た文事に遠ざかつて居る門外漢にも、天然美の推讃者が多かつた。上杉謙信、八幡太郎義家、薩摩守忠度の風流は、史上に名高いものである。今日、私等の間に、花見や、月見や、雪見の興を覺えるのも、一は、祖先からの遺傳に負ふ所が多い。

私等は、遺傳に依て、天然美の價値を直覺した點もあるが、現代では、遺傳から轉じて一種の必要に迫られて、天然に接觸せんとするに至つたのである。現代の如く生活難、就職難の聲を聞く時に當つて、私等の神經は全く疲れ切つて了つた。精力も亦稀薄になりゆきつゝある。加ふるに社會の墮落腐敗は、日一日激しくなつて底止する所なき有樣を見ると、一切の虛僞、不信、形式から逃避して、天然の懷ろに眠りたいやうな心持を起すのである。

「民約論」の著者ルーソーは、僞り多き人間の社會を咀つて、天然美に憧憬れた。乃て彼は、瑞西のビレール湖上にあゝベーテル島に赴いたこ

とがあつた。此の島は、寂寞、太古の如き所て、些の人影を認めない。彼は、朝夕、新鮮な大氣を呼吸して、湖水を繞る森林と岩石と鷲や小鳥の聲に親んだ。彼は、此にあつて、天然の秘奥を直覺して、云ふべからざる快感に打たれたのてある。私等も亦、折々斯うした境地に身を置きたく思ふことがある。一切の形式、習慣の衣を脱して、赤裸々の吾に飯つた時の愉快と、天然美の色彩と音響に疲れた心身を緩和される味は到底、形容し得ぬ處てある。

平和の宇宙

私等が此の人生を辿るには、積極と消極の二面がある。社會の勝利者たらんとするには、徹頭徹尾、積極的態度を以て進まねばならぬ。學窓にある時も、社會に働く時も、それは同一てある。其の志す所に向つては、一歩も退かずに突進せねばならぬ。けれども時には、多少の手加減を試みねば、却て敗れる事がある。即ち精力の經濟を考へる必要があらう。如何なる英傑も、精力には、或限度がある。一時、放散した精力の空虛點は、之を補充せねばならぬ。それには、一時、休息するに限る。三十日間、精力を放散した時は、少くとも、一週間は、休養して、精力の不足を補ひ、その充實するを待つて、又た之を使用すべきてある。

休養法には種々ある。然し天然美に圍繞された田園に赴くのは、最上手段てある。鮮かな太陽、清明な月色、輝く星影、流るゝ河川の色、起伏する山岳の姿、純潔の天眞を其の儘に示す野花芳艸、之等は、私等の眼を休め心を休める力を持つて居る。野に舞ふ蝴蝶、囀る鳥、歌ふ虫、囁く風、それ等も亦私等に平和の思ひを抱かせる。其處には、灰色の憂愁がない、暗い人生がない。虛僞がない、虛飾がない、罪惡がない、爭鬪がない。

總べての物は、融々たる靜平の色に滿ちて居る。

勿論、此の天然美に向つても、或一派の近代人の如く、之を主觀の色彩に染めて見る時は、却て神經を刺戟するかも知れない。けれども詩人たるべき資格を有せず、又た詩人となる必要なきものには、寧ろ神經を慰撫さるゝのである。試みに市街を離れて郊外に出ると、第一に廣々した心持になつて、急に衰えた官能が復活し初める、イラ〳〵した氣分が何時か靜まつて了ふ。一種の悠々たる快さが心の全部を占領する。恰度、惡夢に惱まされたものが、床から出て新鮮な朝の空氣に、初めて目醒めたやうな氣分となる。之れ私等にとつて、最上の休息法である。

偉人は如何に天然美に對せし乎

米國の偉人ルーズベルトは、徹頭徹尾、積極的の態度を執つて、奮鬪する。タフトと大統領の椅子を爭ふに當つての武者振は、颯爽として當るべからざる趣がある。彼が今日の精力は、主として往年の田園生活に負ふ所が多い。今日のルーズベルトは、積極的色彩を以て塗抹されて居るが、一時、消極的生活を續けたことがあつた。

ルーズベルトが政界に志を得ざるに及び、彼は、思ひ切つて、米國西部の僻地、ダコタ州のメッカに退いた。彼の所有の田園は、小ミゾリーと呼ぶミシッピーの上流に沿ひ、水深く原廣き所にある。即ち茫々漠々たる荒原で、人烟を見ない。折々物凄い野獸の聲を耳にするばかりである。彼は、此に休息の歲月を送つて、牧蓄と狩獵とに親み、夜分は、或人の傳記を綴つた。彼は、始終、自由新鮮な空氣を呼吸し、イキ〳〵した山川の風光に嘯いたのである。斯うした生活を送ること、約二年間、彼は麻利支天のやうな頑丈な體格の人となつて、紐育に歸つたのである。

爾來、彼は、猛烈なる政治革新の戰を開始するに至つた。二年間、天然美に接觸して、充分休養したのは、彼の生涯に取つて、多大の利益があつた。ルーズベルトの筆法は、又た私等殊に、學生諸君に取つて、應用すべき筆法である。

天然美に接觸するに就ての利益は、之に依て實物教育の味を解し、精確な知識を得るにある。英國に於ては、此の點が早くから發達して居た。佛國の名士ドラモンは、斯う云つて居る。「英人が農業家としての先天的傾向を有するは何故かと云ふに、私見に依ると、英國少年の多くが、庭園を以て圍繞さるゝ地方の家屋に住居し、半ば田園的教育を受けるためである。（中略）彼等は、常に自然に接近して、滿足の觀念を養ふに足るべき田園生活の思想を形造る。故に其の少年時代は、主として植物、野菜等の培養、禽鳥、動物に對する親みに就て大なる注意を用ゐて居る。總べて此の種の興味は、地方人士の解する所たるべき筈であるが、英國では、此の種の觀念が、大多數の人心に及んで居る。」と賞讃した。動植鑛物、地理、歴史の實際知識は、天然美に接觸するに及んで、得る所が多いのである。

更らに一轉して、天然美を哲學的に見ると、エマーソンの「自然論」中にあるやうな感想が生れるであらう。エマーソンは、天然美の愛好者である。彼の書翰にも、天然美を讃した文句が散見される。

遲々として來らざりし春は、漸くに來り、日々の天氣を長閑ならしめ、愉快ならしめ候に於て、庭園果木の間に、自然の美を友として悠々日を消す樂しき怠惰は、他に少かるべしと存候。木を接ぎ、枝を剪み、花木の事に餘念なき時は、清晝夢の如く、紛々たる俗事、心を離れて、限りなき長壽、此の樹間の幸福なる氣樂なる勞働者に約せらるゝが如く

思はれ候。云々。（『惠磨遊の書簡』より）

斯う云ふ風に、彼は天然美を愛した。彼は又たコンコルドの地にあつて、朝夕、草原を歩み、樹下を逍遙しつゝ、冥想に耽つた。彼の透徹した眼は、天然美を單に一個の寫象としてのみ見ずに、眞善美の符號として見やうとした。即ち天然美を透ほして、其の底に流るゝ思想を心讀せんとした。故に彼は、佛國の或哲學者の言つたやうに「物質的物躰は、必然的に造物主の根本思想の滓の如きもので始終、其の來由せる根本と的確な關係を保つて行かねばならぬ。云ひ換ゆれば、眼に映る自然は、心靈的、道德的方面を有せねばならぬ」とした。斯うした深い見方をすると、一段、深い意味と興趣とを感ずることになる。之も亦一個の清き樂みである。否、それよりは、嚴肅な宇宙の大法に接觸する最初である。私等は、此處迄進みたいと思ふ。

旅の趣味

私は、今疲れ切つて居る。頭の具合も、胃腸の具合も惡い。總べての事物が、枯死せるかの如く見えて、何の興味をも呼ばない。單調と平凡とは、私を惱まして、最早、反抗する丈の勇氣もない。斯うした時に、第一に思ふのは、旅に出たいと云ふことである。旅に出て、天然美の懷に抱かれたいのである。自由の表象とも云ふべき廣い海、平和の故郷とも云ふべき平野、河川、雄大なる氣分を湛ゆる山岳の間を迴る快さは、百萬の富を得るに優る。戰はんための休息所としては、それ以上に越すものはないのである。新しい心持、鮮かな氣分、快活なる氣象、之等は、期せずして復活するであらう。私は、旅に出やうと思ふ。

"A nobler want of man is served by nature, namely, the lobe of Beauty"

第八　社交と演説と文章と

社交、演説、文章。此の三者は、如何なる場合にも、成功を助くる要素である。而して何れも密接な關係を持つて居る。社交に迂遠なものは、常に世の劣敗者である。演説文章の下手なものは、到底、自己の意志、感情を快く天下に表白することが出來ない。それと反對に、社交に巧みなものは、何人にも敬愛され、演説、文章の巧妙なるものは、終に其の頭角を現はさゞれば止まぬのである。

けれども日本人は、如上の三者に於て、今日も尙、歐米人に及ばざるものが多い。歐米に於ては、社交は勿論、演説、文章に上達した人が少くない。日本には、斯うした準備と長所とを具備したのが極めて乏しい。此の儘押し通してゆくことは、社會人文の發達から見て甚だ不利である。急いて何とかせねばならぬ。今からでも何とかしたい。

社交に於ける信用

社交の必要は、此に說かずとも宜い。社會に出て、一事一業を綱めるには、これが熟達を要することは明かである。けれども長い間、割據的、孤立的の境遇に置かれた同胞は、特に社交に就て、特殊の注意を拂はなかつた。それに維新の改革と共に、一時、社交の規矩準繩たる禮法や作法も打くづれたので、混沌たる狀態に陷つた。今日は、新しい明治の社交に關する自然の不文律が、次第に成立ち初めたのである。

社交に就ては、學生時代から相當の用意をなすのが至當である。學生諸君の間にも、小なる社交がある。下宿屋に於ける訪問、寄宿舍に於ける生活、同窓會等に於て、其處に無邪氣な自由な社交がある。人によ

ると、快活な社交の空氣から離れて、全く孤立するものがある。けれどもそれは例外で、大抵、社交の空氣に接觸するであらう。其處に親みと溫味とが包まれて居る。

私は、諸君の間に於ける淸き社交の空氣を喜ぶものである。下宿屋に於て、諸君が、其の二三の友と、校內の人物を語り、學科の難易を語り、其の日の社會的出來事や、讀書に就ての所感を話す時、諸君の目は涼しさを加へ、其の頰には、熱誠の色がほのめくであらう。一杯の澁茶、質素な燒芋、鹽煎餅は、諸君の襟懷を寬うするであらう。

諸君が會心の友を得るのは、此の社交の間に於てである。一生、苦樂を共にする友人は、左程、多くない。一人か二人に過ぎない。それには、廣く友を求めて、其の中から嚴密に選り出すことが必要である。從つて社交上に於て、充分の信用を得る必要がある。如何したら信用が得らるゝ乎。それは、「誠」の一字を身に體し、心に行ふより他に、何の方法もない。

如何に社交術を、研究しても、「誠」の一字が欠けたら、何人にも容れられないであらう。之を狹い學生時代の社交界に適用することに於て、一層、「誠」の價値を發見する。カーライルが「眞實は萬事の根本なり、一切の才力の最大なる要素なり」と云つたのは眞理である。

誠實と誠實

石田三成は明治に入つて初めて一個の英傑として認識さるゝに至つた。彼は男らしい卓越した政治家であつた。故に彼は、當時の武斷派に咀はれたに關らず、力强き友を有して居た。大谷義繼の如きは、其の一人である。大谷は、最初、石田の周旋に依て、秀吉に仕へて以來、累進

して、敦賀城主となり、終に刑部少輔に叙せられて、五奉行の一に列したのである。斯うした關係から、石田と大谷とは濃かな友情を以て交はるに至つた。其の後、石田が關ヶ原に於て、家康に一擊を加へんとするに當り、大谷は極力反對して、諫止しようとしたが、石田の意志は、到頭動かない。けれども大谷は「既に密謀を打開けられた以上、友人として石田に殉せねばならぬ」として關ヶ原に勇ましい最後を示した。之れ「誠」を以て始まり、誠を以て終つたのである。若し石田が大谷に對する「誠」を以てしなかつたら、斯うした友を得る機會も力もなかつたであらう。社交の成立も、其の美果を結ぶのも、必竟「誠」を土台とするにある。其の細節の如きは、此に一々述べなくとも宜い。

實用文章

社交の一部に屬する機關は、實用文章である。書翰、祝辭弔辭、論文、意見書の如きは總べて實用上欠くべからざる要具である。就中、書翰は、常住座臥、必要を生ずる。諸君が離れて居る知己に情想を寄せようとする時、或は當面の用事を辨ぜんとする時、之を書翰に托せねばならぬ。斯うした必要の存する割合に、書翰其の他の文章は、一向發達しない。又た特に此の方面に苦心するものが少い。全く矛循して居る。

文化の發展に伴うて、通信文の應用が、益々擴大せらるゝのは、自然の勢である。書翰に依て、私用をも、實務をも辨ぜねばならぬ場合が多くなる以上は、之に對する用意をなすべきである。私は、諸君に文章家になられよとは申さない。又た巧妙なる作文を生產するやうに勸めたくはない。けれども實用に適する程度に於て、文章の練習を怠らぬやうにされたいと思ふ。

鮮かに浮ぶ個性

書翰文の法則とか、作法とかは、最初から規定されて居ない。從つて一々之に準據する必要はないが、多少、眼を透す必要はあらう。然しそれよりも、諸君が書翰文の進歩を計るには、練習のため、友人間に屢々通信文の往復を試みるが一番宜いやうである。勿論、其の問題の中心は、學科に關連したもの乃至家庭内の些事、新聞雜誌上の記事に對する所感ナゾでも結構である。唯嘘を云はぬやうにして、此にも「誠」を以て一貫したら、不知々々の間に書翰文の「コツ」を覺え込んで了ふてあらう。

修辭學上の工夫や、組立は、それから以後に注意すべきである。

書翰文を書く時の心持は、自由な廣々した快活な趣があつて欲しい。從來、因はれた思想や、固定した文句は、成るべく用ゐぬやうにしたい。

諸君特有の思想感情と自然に湧いて出た文句を使用さるゝやうにされたいのである。云へ換えると、諸君の鮮かな個性を、書翰文の上に表現するやうに努力すべきである。假令拙劣でも幼稚でも、斯うした心持から出來上つた書翰には、一種の光がある。それは僞らぬ個性の輝きである。

哲人の書翰

私は常にエマーソンの書翰を愛誦して居る。それは、此の哲人の僞らぬ氣高い個性が、自然に澄んだ水に映つた雲影のやうに浮び出て居るからである。其の自然、人物、書籍に對する所感を、隨時に友の許に寄せた總べての上に眞實が輝いて居る。彼の書翰を見ると、その平和な高い生活、平凡な人生にあつて、思索を非凡幽邃の境に潜める趣が、手に

取るやうに分明るのである。即ち彼の書翰は、彼の寫眞そのものである。否實物そのものと云つて宜い。

小生は、瑚珀色の夕日の影を浴びつゝ漫歩して、幸福なる貴兄の御身上を思ひ、丘陵、谿谷、花咲き草香る平野を隔てゝ十七哩彼方なる貴兄の許に「嗚呼幸なる哉吾が友よ」と、一聲を送り度しと欲せし事屢々有之候。愛兄よ、小生は實に深く兄を敬愛するものに候。兄も亦願くは胸裡の一隅に、弟に對する一片の溫情を保ち下され度候。御互の友情は、他日大に貴き結果を生ずべしと存候。小生は決して貴兄に忘却せらるゝを忍び能ふものにあらず。寂しき森林の中に獨歩して、常に兄を幻に描き、其の幻と語る。蓋し吾々の靈を通はしむべき不思議なる道の存するあるに相違なく、吾が思ふ所、亦た兄の心を動かす事あるならんと想像致候。是迄貴兄の小生に對して表顯し給へる親切は、小生の天地に於ける最も輝きたる光にして、日光も決して之に及ばず候。云々。

此の書翰を見ても、エマーソンの清い溫情が溢るゝやうに流れ出て居る。巧妙な文章以外に、別な光を放つて居るのは、それがためである。彼の「誠」が一字一句にも充實して居るからである。

經世の一機關

論文は、始終、必要を感ずるものではない。けれども學生諸君の間に於て、有力な論策を生産し得るものが少いのは、如何した理由であらう。美文、ハガキ文、短文のやうな情感を主としたものには、優れたものを見受ける割合に、論文は、其の出來榮えが宜くない。情感を主としたものは感じた儘を正直に述べれば宜いが、論文は、主として理智の所産であ

るから、其の題目に就ての調査研究を要するのみならず、之を述べるには、整ふた論理の法則から離れることが出來ない。斯うした條件の下に進まねばならぬから、相當の努力を要するのである。それがために進んで論文の上に卓越せんとするものが稀薄になるのであらう。

けれども現在の如く、論壇の不振を見るに當つて、切に諸君の奮勵に期待せねばならぬ。私は、單に之を文壇のために望むのではない。現在、政界の狀態を見ると、或僅少な權勢家が恣まに一國の運命を左右して、議會の人々は、小さい眼界に齷齪たる狀態に沈滯して居る。之に對する國民の中流階級は、矢張、封建時代の因はれた習俗に縛り付けられて、健全な政治を作り上げやうとする聰明と勇氣とを缺いて居る。單に之を東京市の上に見るも、市長の撰擇に就て、有力な市民の多くは沒交渉の有樣にある。市長の善惡は大日本の首都の運命を支配することを思へば、到底、之を輕く見るわけにゆかないのである。而かもそれを平氣に傍觀しつゝあるとは何事であるか。のみならず、市會の一隅に割據せる暴慢な黨派の跋扈を不問に付するとは、何と云ふ腐甲斐ないことであらう。結局、日本の政治は、低調の極度に墮して居るのである。

獨り政治ばかりではない。敎育界の固陋偏狹、實業界の不振墮落、之を具體的に述べるのには、優に一大冊を要するであらう。斯うしたあらゆる弊害を一掃するに當つて、自家の正しい意見を發表する機關は、論文に非ざれば、演說である。此の場合に於て、論文は全國を相手として其の思想を吹込み得るのである。總べての革新を成就する第一步として、先づ論文の練習をなすことは、諸君をして他日の英雄たらしむべき動機である。少くとも大人君子として、社會の健全を維持する折

には、論文の要具を通じて、一般を警醒すべきである。諸君は、書翰文と共に論文に親まねばならぬ。

精神的雄辯

論文と相俟つて必要なるは、演説である。日本にも、昔から演説らしいものはあつたらう。けれども眞に之に着眼し初めたのは、維新以來である。西洋では、早くから雄辯家を出した。經世の志ある者は、好んで演説の習練に努力した。古きギリシヤ時代に於て、アテネ人は、雄辯を熱愛した。爾來、巧妙な演説家の輩出を見た。歐米に於ける言論界の壯觀は此に負ふ所が多い。

私は、雄辯の價値を絶對に認むるものではない。けれども不言實行にも價値があれば、雄辯實行にも更らに價値がある。無責任な空論に耽るのは、愚劣極まることであるが、責任ある言論は、之を發表して少しも差支えがないのである。天下の大事は元より、市町村の主要な事物も、主として討論に依て決せらるゝ今日、諸君に一片經世の志ある以上は雄辯家としての資格を具へることが必要であらう。

然し其の心の中に潜む「誠」の清泉から溢れ出たものでなければ、演説そのものに何の權威もない。形式上に美果を收めても、内容に貧弱なる以上は、何もならぬのである。自己のための利を計る方便に、健かなる辯舌を弄するものは、終局の勝利を占め得ぬものである。私は、此の意味に於て、形式的雄辯よりも寧ろ精神的雄辯を愛する。

「誠」の心

雄辯は、一種の技巧である。之れに精神の火を點ずるに依て、初めて

其の偉大なる光輝を發するのである。横暴な政府のために詭辯を弄する政治家は、精神の底に「誠」がないから、一種の演説技師である。舌の俳優である。若し其の雄辯を正しい道のために使用したら初めて充實した演説家を以て許されるであらう。不幸にも我國には、精神的雄辯家が乏しい。何となれば、所謂演説家の多くは、浮薄な惡時代思潮に蕩漾されて、上すべりばかり、場當りのみに傾いて居るからである。それにつけて、私が敬慕に堪へぬのは、英宰相ビットや、グラッドストンの演説振である。ビットが「奴隷賣買禁止案」を通過させやうと必死の雄辯を揮つた時、グ翁が一八六〇年の豫算に關して四時間に亘る大演説をなした時、私等の心臓を鼓動せしむる力がある。

グラッドストンが大雄辯家であつたことは、ジョン、モーレーの評論にも見えて居る。「世人は多くグ翁の雄辯を以てバークに比するも、バークは、絶代の雄辯家、英國史上最大の演説家である。其の米國戰爭を論じた二大演説の如きは、雄辯の技能を完全に近く發揮したものである。けれども其の演説の變化多きと、多方面なるとに於ては、グ翁は、優にバークを凌ぐ。鋭き論法、紛糾せる事實を明確に表現する點に於て、或は熱誠を以て最高の情想を語り、或は高き道理の光を以て聽衆を深高な主義に導く點に於て、或は又疾風の如く雪崩の如き勢ひ他の議論を屈伏させ、高く大きい目的に迄人心を誘ふ點に於て、グ翁には、卓越した力があつた」と云つて居る。此の批評に依ても、彼が精神的雄辯家であることが知れる。私は斯うした雄辯家の出づることを翹望せざるを得ない。

私は、之れ以上を此に説くに及ぶまいと思ふ。雄辯術の秘訣も、必竟、押しつめてゆけば、「誠」の精神にある。

"Eloquence, like every other art, rests on law the most exact and determinate. It is the best Speech of the best soul. It may well stand as the exponent of all that is grand and immortal in the mind."

第九　有用なる書籍

人の一生は、經驗と研究との堆積である、連續である。始めて母の胎内を出て、半無意識に手に觸れる事物に就て、既に二度目からは一種の經驗を積む。而して漸く少年時代に入つて、不完全乍らも、研究の心持を或特殊の事物に向ける。それから以後は經驗と研究との長き連續で、此の世を去る迄、止む時がないのである。其處に人生の趣味がある、光彩がある。

經驗と研究の合一は、私等に知識を與へる、洗錬された情感を附與する。即ち私等の内的領域を擴大するのである。諸君が中學に居らるゝ時、學校と讀書との二方面から主として經驗と研究との成果を得る。就中、讀書から教へらるゝ所が多い。何となれば、書籍は數千年來幾多

の英傑名士が其の苦心を重ねて漸く得た經驗と研究との結果を、一切、書き殘した結晶であるから――

暗黑を照す知識の光

諸君、經驗と研究の面白味は、自分が直接得た時ほど愉快を切實に感得する場合はない。けれども學窓にあつて萬有に關する一切の經驗を得るこれは、到底出來ない。宇宙は廣い、人生は複雜である。偉大なる哲人すら一生、苦心して、尙宇宙の謎を解き得ないのであるから、單に獨力を以て、乾坤の秘密を嗅ぎ知ることは出來ない。のみならず、國家に對し、社會に對し。天然と人生とに對し、自己の周圍に對して、如何した ら正しく振舞ひ得ようか。之れが又た相當の苦心を要するのである。左樣したことを考へると、徒に心が亂れて、底止する所がないであらう。

迷の家を出て、又た迷の霧の中に沒入せねばならぬ。唯、此の際一點の光を示すものは、古來殘れた書籍である。書籍の寶庫には、何時も聰明な快い光が白晝の如く輝いて居る。迷へる暗黑の部分は、之に依て明るくなる。幸ひにも、私等は、古人から今人に至る迄、數千年間の經驗と研究との結晶を、眼前に展開せられ、之を自由に攝取し得るのである。私等は現代に生活することを感謝せねばならぬ。

惡書の跋扈

けれども此に一つの困難がある。數千年間の書籍を展開された場合に、何れを撰擇して宜いか。假令、或種類に限るとしても、其の同種の中に又た幾百種あるかも知れない。其の中から何れを採用しようか。私等は、善美を盡した多くの佳肴の前に出て、戸惑ひするやうな心持に

なる。のみならず、同じ佳肴にも、自ら優劣の差があるから、一層之を撰むに困るのである。それでも古人の殘した書籍は、幾百年間の生存競爭に陶汰されて、劣れるものは葬り去られ、優れたものゝみ保存されてゆくから、其の保存された物に就て撰擇を加へれば宜いのである。けれども今人の書いた物は、維新以來、無數に出て、今日も日毎に二三種の新刊書を見ぬ時がない。勿論それは主要なものばかりで他は幾十種とあらう。從つて善惡優劣の差が殆んど分明らない。總べてが混合錯雜して、投げ出された儘にある。之れが又た一つの困難である。此の點に就て、トルストイ翁は、惡書の跋扈を呪咀した。然り、良書よりも、惡書が分量に於て、勝利を占めて居るのである。

名士の愛讀書

先づ歐米及び我國に於ける定評ある先人の著書に就て云へば、之にも人に依て種々の異見があるから、何とも斷定し得ない。第一に其の種類に就ての好惡から見ても、人さまゝ〳〵である。例せば、カウバーは、唯、聖書と祈禱書を愛誦し、ペートベンは、小說と歷史とを好み、フランクリンは、主として政治經濟の書を喜び、スキフトは、拉丁諷刺家の著作を嗜讀し、アヂソンは、金貨其の他貨幣の歷史を熱愛したと傳へられて居る。それからカーライルは、獨佛の文學及び歷史を、テニスンは、古英國物語を、ケーザルはホーマーの詩を、エマーソンは、熱帶の聖書ヴエダ經を愛して止まなかつた。エマーソンは、ヴエダ經を推賞敬讀して、

ヴエダ經は、太陽の熱の如く、夜の姿の如く、風なき太洋の光景の如く、莊大雄美にして、其中には、高尙なる詩情を有する人物の心を動かすべき、種々の宗教的感情と、高大なる倫理思想とを包有す。而して此

の經典の各章には、荒誕無稽の記事甚だ多しと雖も、其中に包まれたる太古の大感情に接觸して、其の莊嚴を感知するは、決して難き事にあらず候（『エマーソンの書翰』より）

と云つて居る。我國では、曾て「時事新報」が朝野諸名士の愛讀書十種を連載したが、種々異つて居た。けれども論語、聖書、沙翁、ダンテの作、之等は、一般に有益に推讃されて居る、法華經も亦、壯大なる宗教文學として敬讀されつゝある。數百年間の生存競爭に打勝つた書は、大抵、永き生命を有すべきものである。

如何なる書が有益なるか

諸君、恐らく諸君が讀書の嗜好も、十人十色であらう。理科に關するものを好む人もあらう、歴史に屬するものを愛する人もあらう、數學に關するものを喜ぶものもあらう。或は文藝に屬する種類を熱愛するものもあらう。兎に角、此に推測的に概括して、云ふことは出來ない。けれども好惡は別として、諸君に最有益なる書は、歴史、地理、理科、博物に關するものであらう。それから政治上の事も多少、知つて置かねばならぬ。現在の學校教育では、諸君に政治思想を與へない。絶體的に禁止して居る。私等は、斯うした教育を受けた結果、政治上の無知者として の十數年を送つた。然し今後の國民は、如何しても政治上の知識を具有せねばならぬ。學校に於て教へなければ、諸君が進んで之を講究すべきである。歴史、地理、理科、博物に就ては、今更、必要を述べる迄もない。諸君の常識を養ふ土臺となるものである。

模倣の文明

我國の文明は、未だ日本固有の特色を發揮しては居らぬ。精神界も渾沌たるものであるが、物質界の進歩も亦茫漠たるの觀を免れない。必竟は、歐米模倣の文明が多いからである。現在の精神界の萎靡不振も嘆すべきである、物質文明の不振に至つては、更らに恥づべきである。總べて歐米人の開拓してくれた道を歩むに過ぎない。例せば、自働車、電車、飛行機、活動寫眞の如き、新文明の産物とも云はるゝのは、總べて歐米の發明になる。我國に於て先鞭を着けたのは、全くない。最新式の執務器でも、矢張、碧眼の人の工夫になるものが多い。カードタイム、レコーダーにせよ、時間印刷器にせよ、コムトメーター計算機械にもせよ、新式ホチツキスにせよ(ホチツキスは一擊、五十枚以上の紙を綴ることが出來る)何れも彼方の發明になるのが多い。我國では、辛らうじてそれを模倣し、應用するばかりである。必竟は、理化の知識が一般に行渉らぬ爲めである。物質文明の先驅者たるべき名譽を荷ふには、進んで理化に就て深く研究せねばならぬ。總べての商工業は、理化の後援に待つ所が多い。私が諸君に理化に關する書籍を御勸めするのは、之がためである。

書籍の選擇標準

諸君、今、私が御勸めした書籍――歴史、地理、理化博物――に就て、何を撰擇しようかと云ふことが一つの問題である。書籍撰擇に就て、エマーソンは斯う云つた。

第一、世に行はれて來た一年を經ない書籍は讀むな

第二、有名でない書籍は讀むな

第三、自分の好まない書籍は讀むな

之れは少し消極的に過ぎる。けれども第二、第三は、直ちに適用しても、左程差支えはない。唯、時として非有名の書籍中に、尊敬すべき名著があるが、之は百分一の比例と見るべきである。

若し更らに私の小さい考へを述べると、第一に著者、第二に其の題目、第三に其の目次、第四に其の書の評判。之れだけ調べた後に決すれば、先づ間違ひは少いであらう。文藝上の作品は、別として、學術に關するものは、其の著者の相場が、略ぼ一定して居る。各學界に於ける主要なる花形役者は、左様なに澤山はない。例せば、西洋史學の箕作氏、生物學の丘氏、哲學の桑木氏の如きは、立派な學者である。從つて其の著書も略ぼ推測し得る。即ち充分の信用を置くべきである。著者の注目する必要は此にある。けれども一方に於て、左程有名でない迄も、通俗講話をなす上に特殊の長所を具へた人物がある。斯うした人の手になつたものに、往々、讀むべきものがある。唯、其の著者の名のみで判定が付かぬ時は、進んで其の題目と目次とに注意すれば、大抵、新味に富めるものか、陳套なものかは分明るのである。同じく地理を說くにしても、池邊氏の「世界讀本」や小田内氏の「歐羅巴」の如きは、或意味に於て、通俗的讀物としての新生面を開いて居る。斯う云ふ風に新味のある纒つたものは、其の著者の有名無名に關らず、一讀を要する。目次や、題目だけで分明らない場合は、エマーソンの云つたやうに多少、時日を待つて、其の評價が定つてから取捨を決すべきであらう。

余の愛誦する名著

私は、趣味が徒らに廣いために、何ても無暗に讀む。即ち讀書の範圍が廣い。けれども多少の撰擇は加へて居る。私も地理、歷史、理化博物

に關するもの、及び精神修養に資すべき書、政治に關する著述を愛する。唯、乾燥な書き方をしたものは、總じて好まない丈てある。修養書としては、

論語　聖書　法華經　菜根譚

碧巖錄　夜船閑話　氷川清話

等を愛する。それから「大隈伯百話」「青淵百話」「福翁自傳」等を敬讀する。新渡戸博士の「修養」も亦私等を啓發する所が多い。政治上の著述は、主として名家の手に成る論策の類を愛する。迂遠な學究の所產とも目すべき枯死した政治學は、絕對に好まない。

歷史では、箕作博士の「西洋史講話」と「西洋史新話」とを愛する。竹越の「二千五百年史」と「新日本史」は、兎も角、面白く讀むことを禁じない。地理では、一時、矧川氏の著書を嗜讀したが、現在では、諸家の紀行文――海の內外共に――を喜ぶ。乾燥な地理書よりも、却て啓發さるゝ所が多いのてある。蘆花氏の「順禮紀行」は、曾て頻りに親んだ記憶がある。理化學は、丘氏の「進化論講話」及び諸家の通俗な說明を試みた小冊子を時々見るのが樂みとなつて居る。

知識に魂を與ふるもの

諸君、私は、大なる問題として、最後に述ふべきことを、唯一つ殘して置いた。即ち精神修養に關する著書てある。現在の中學敎育は、何人が定めた制度てあるか、私は一向知らない。けれども各方面に欠陷を有することと丈は斷言し得るのてある。單に知識の鼓吹に傾いて、德育に就ては、輕き注意を拂ふに止つて居る。德育萬能てはないが、德育を中心としなくてはならない。知識に魂を與へて、之を正しく働かせるの

は、德育の力である。それを輕く取扱つて居る中學教育は、不具者と同一である。所詮は、根本的改革を要することであらう。從つて諸君は、學校以外に於て、諸君の精神修養に資すべき書籍を求めて之から善良卓越した感化を受けなくてはならぬ。少くとも、私が愛讀書として列擧した中の數種に就て敎へらるゝ所がなければならぬ。此の問題は、一番大切であるから、歐米の修養書と、日本在來の修養書の中から最も定評あり、權威あるものを撰んで、併行して敬讀すべきである。

"We owe to books those general benefits which come from high intellectual action. Thus, I think, We often owe to them the perception of immortality. They impart sympathetic activity to the moral power."

第十　新聞雜誌の讀み方

生活の樂趣！

それには、いろいろある。一日の生活の中で、朝早く散歩するのも樂みの一つである。交友と話すのも樂しいことである。けれども新しい印刷インキの匂ひの失せやらぬ新聞紙を手にすることも亦樂しいであらう。

單調な毎月の生活！

隨分、退屈なことも多い。嫌な日もある。面倒な仕事もある。けれども期待した新しい雜誌に接するのが一つの樂みである。有力な數種の雜誌を飾る論文や創作に親む時の快さが私等を魅する。

文明生活の表裏を、さながらに映し出す新聞雜誌は、一種の新刺戟を

齎らすと同時に、又た屢々有益な暗示を附與するのである。之に遠ざかるものは、時代の敗者とならざる迄も、迂遠に陷ることを防ぎ得ない。

甘美なる回想

少年時代を回顧した先輩の多くは、古き新聞雜誌が初めて生誕した頃の快味を連想さるゝであらう。後進として明治十年後に生れた私は、其の漸く物心付く少年となつた時、『小國民』と『幼年雜誌』『少年世界』の前身)とに依て啓發された。當時、極彩色の石版刷の口繪と網目木版の繪とは、新奇な理科工藝の話と日本最初の御伽話とに依て、私等を歡喜の世界に導いたことを覺えて居る。活動して止まぬ知識慾の芽は、之に依て成長し初めたのである。同時に滿足の感じを與へたのである。

新聞紙に就ても、矢張、雜誌に對すると同樣の感じがある。通俗な低い小說が、妙に少年のロマンチックな感想を誘ひ出す力となつた。事實上あるまじき强い完全な英雄――小說の上の――に引き入れらるゝやうな崇拜の血を湧かした。それに依て報ぜらるゝ日々の新現象に小さい好奇の心を滿足させたやうに覺える。三十の坂を越えた今日では、少年時代に比して頭腦が鈍つて了つたから、多少、受入れる感じも異つたが、それでも別な面白味を發見することが出來る。

社會種に對する用意

新聞雜誌の必要は說かなくとも宜いが、之に對する心持と云つたやうなものは、少しばかり御話して置かう。雜誌にしても、新聞にしても、

各自が一番、密接の關係を有する部分から讀み初めるのは事實である。政治家は政治を中心として讀み、實業家は農工業に就て特に注意するの類である。之と同樣、學生諸君は、第一に學生界の消息乃至學校に於て敎へらるゝ課目に關係を有するものに注意の目を睜るであらう。其の次ぎに眼に觸るゝのは何であるか。新聞ならば、社會種に觸目するであらう。

社會種は、其の日〳〵の社會に於ける出來事を記して、之を翌朝の紙上に報告するのであるから、社會の半面は、之に依て覗はるゝであらう。恰度、活動寫眞のやうに、日々生起する事件が、目新しく紙上に反映さるゝのであるから、讀むに骨が折れない。興味も多い。けれども折々、衝動的題目と內容とに逢着する。それが鮮かな心持を持つた學生諸君の心裡に何を印象するか。少くとも、之が諸君の一部に向つて、僥倖心や、惡戲や、色慾を喜ぶ傾向を挑撥するのは、蔽ふべからざる事實である。諸君の多くは、斯うした淺薄な記事に誘惑せらるゝには余りに强固である。けれども不知々々の間に幾分の惡印象を止めぬとは限らない社會種に眼を注ぐには差支えないが、豫め冷靜な心持を有せねばならぬ。少くとも、其の惡い空氣に感染しないやうにしたい。

獨立せる評論

御用新聞、政黨新聞は第二として、中立新聞は、普通の人々に政治的敎育を與へる機關である。學校に於て政治から途絕された私等は、新聞紙上の論評に於て、政治的興味を感ずるに至るであらう。惡政治の下に支配さるゝ場合に於ては、一般の民衆は、最も苦みを嘗めなければならぬ。過日の新聞紙上に、一巡査が生活難のために、泥棒に變化したこ

とが報道され、「萬朝」の如きは、特に此の問題に就て言議した。之は米價騰貴其の他の事が一原因をなして居るてあらう。けれども其の根本は、政治の不振にある。剛直高潔な政治家が居ないため、天下に先立つて憂慮する人物が政府部内に乏しいため、種々の弊害を生ずるのてある。我等國民は、此の政治を監視せなければならぬ。それには、有力な中立新聞の言議に耳を傾けて、輿論――不正ならざる――の傾向を案ぜねばならぬ。諸君は、獨立せる新聞紙上の論評を愛讀すべしてある。其の他社會一般の新問題に關しても、Suggestion を與へる所が多い。唯、それが理想的の境地に達せぬ、丈てある。之は理想の新聞が生れない以上、如何することも出來ない。現在は、比較的優越な新聞紙を見る他はない。

海外に於ける形勢

諸君は、三面雜報と共に硬派の記事――政治、經濟、學藝――にも多くの注意を拂はねばならぬ。處が此の方面の記述法は、極めて無味乾燥に流れたものが多い。從つて多少、讀み難い、如何しても暖味に乏しいけれども社會種よりも、斯うした方面に、諸君を啓發するものが多いであらう。物質文明の新しい消息と報道とは、殊に諸君を益するてあらう。之等は、日毎に切拔いて、拔萃帖に貼付して置くと、有力な參考となるのてある。

諸君は、歐米から來る電報、內地の各方面から來る通信等に依て、世界一般の大勢を諒得するに力めねばならぬ。自國の事は、細大となく、知つて置く必要があるが、歐米及支那等の形勢も、日一日推移するのてあ

るから其の變化する道筋を略ぼ知つて、未來の形勢を揣摩する材料とすべきである。世間の勝利者たるには、時代を解すると共に、之に適應してゆき、進んでは、其の指導の地位に迄肉迫しなければならぬ。唯、漫然として空過するのは、大なる損失である。それから新聞小說は、各自の自由に一任して宜い。左程重く見る丈のものに乏しいからである。

特に精撰せよ

雜誌の讀み方に就ては、別に注意する程の事もない。唯、淺薄な場當り的のものに近付かぬやうにすれば、それで濟むのである。學生諸君の中には、一種の雜誌熱に感染して、手當り次第に、面白相なものを讀むのは如何であらう。頭腦を疲勞せしむる丈で、何の得る所もない。諸君は、適當な優れたものを二三種、熟讀して、靜思するが肝要である。殊に大家の論說は、冷靜に讀んで、之に雷同することを避け、自ら疑問を提出して、識見を進める一助となすべきである。大家なればとて、一も二もなく盲從して、悅服するのは禁物である。少くとも、私は左樣したことを好まない。

第十一　文學好の青年へ

敬愛するS君、

君が或青年文藝雜誌に寄せられた小説は、快く拜見いたしました。新しい官能の匂ひ、纖細な感情の微動が、能く表現されて居ります。近來の御傑作と思ひます。爾後、益々向上の一路を辿り給はんことを望みます。

唯、私が此に心配して居る一事があります。それは、君の手紙にもある通り、君の意志が薄弱になつて仕樣がないと云ふ點です。何事を完成するにも、意志が弱くては仕樣がありませぬが、文學者の中には、如何も強い意志を持つ人が少いやうです。若し君が文藝家として進まるゝならば、勿論、結構ですが、君の御父さんも、又た君も、文藝を娯樂とするに止つて、職業は、別に得やうとする御考へであるやうに拜承いたしました。それならば今の中に、弱い意志を強固にすることが、何より肝要でありますまいか。

反省すべき注意點

S君、

私は君の性格の美しさに敬服して居る一人であります。而して之が圓滿に發達せんことを切望して居ります。それ丈に、私は、君の事に就て、障碍が起らぬよう、平生、心から祈るのです。けれども君は、ともすると、文學を熱愛する結果、放縱な彼等の或群の中に這入つて、其の空氣に感染するのを、何とも思はれぬやうです。

既に文藝家として起つて居る人々に對しては、私は、決して其の放縱

を咎めやうとはしませぬ。繩墨的な社會を呪ふ彼等に、強ゐて反對しようとはしませぬ。けれども君は、會社か銀行に這入るべき將來を有して居らるゝ以上は、全然、文學者氣質に沒入すること丈は、制止するやうにありたい。少くとも君が本來の美しい清い性格を失はぬやうにされたいのです。

誘惑され易き傾向

S君、

私は、文藝を熱愛する點に於て、人後に落ちぬ積りです。けれども狹義に於ける純文藝――殊に近代的のもの――の中には、隨分、大膽な不健全な思想を寓したのがあります。之等に對する官憲の態度に就ては、今此に述べる迄もありませぬが、私は、思慮分別のある時期に入らぬ人々には、幾分か妙な影響を與へはしまいかと思ひます。私の如く三十を越したものは、最早、如何なる放膽な猛烈な思想に對しても、或一定の判斷力に依て、取捨することが出來るやうに思はれますから、何とも思ひませぬ。寧ろ一切の思想に對して、廣い胸を以て向ひたい。けれども中學時代の人々には、精確な理智の判斷がありませうか、世故に馴れた經驗がありませうか。恐らく之は左樣なにありますまい。それ丈に如何なる思想、感情も、斬新な猛烈な傾向を有するものは、受け入れ易いのであります。而かもそれが受け入れられた儘、殘留して根を持ち、葉を生じて、思想の庭に瀰漫るやうになります。此の點は、特に注意すべきことです。

舊思想、舊道德が破壞されて、僅かに其の餘喘を保つ今日、新思想、新道德が未だ醱酵しつゝも、充分に釀成されぬのですから、いろ〳〵の言說

が、我儘、顔に横行します。新文藝の思想の中に、極端な個人主義の包含されつゝあるものが少くない。自由なる解放――道德上に於ける――を欲求して、全き自我を一切處、一切時に擴充せんとする傾向は惡くはありませぬが、それが一轉して、極端な個人主義として現はるゝ場合は、何者をも犧牲に供して自分のみの快樂、利益を追求するに忙はしくなります。同時に何ものにも反抗してゆく態度を現はすやうになります。

文藝を道樂として居る青年の一團が、ともすると、右のやうな思想に感染して、次第に極端な個人主義の人になるのは、決して喜ぶべきことてありませぬ。勿論、君は、此の方へ誘惑されないでせう。私は、固く左樣信じます。

古典の價値

S君、

文藝家の一團が、絶えず新しい試みに努力しつゝあるは、喜ぶべきことです。明治の文藝は、益々此の點に於て發育するのであります。けれども新を喜ぶ餘り、奇に渴する餘り、眞を捨てんとするのは、如何でせう。古い傳說や、古典文學をも、ともすると、咒咀しやうとするのは、喜ふべきことてありませぬ、古い文藝の野にも、又た新しい光が輝いて居ります。少くとも新味に欠けても、眞味の充實したものがあります。精神修養の上に於て、大なる權威を有する古典が存在して居ります。私は、新しい哲學、新しい道德說と共に、此の古典の或物に對して、深き敬意を有するのです。

處が文學を道樂とする若き人々の中には、歐米の文藝哲學を尊崇するの餘り、ともすると、在來の古典を閑却して、之に近付くことを避け、時としては總べて之等に對して反抗しやうとする傾向を示すものさへあるやうです。若し直言すれば、精神修養の上に於ては寧ろ東洋の古典に深き趣と味とを見出します。佛典を初め老莊や、論語等に、多くの眞理を包んで居ります。從つて歐米の新說及び其の古典と共に、東洋の古典をも尊重して、之を自分の精神鍛錬の材料とせねばならぬのです。歐米崇拜の夢は、今、打破せねばならぬ。自分の足許を見ることを忘れ、自家の古き寶を忘れて、唯、新しいものゝみに渴仰するのは、極端に過ぎます。新味と眞味、此の兩端に親むことが必要であります。私は、君が必度、此の兩端を尊重することを信じます。

中毒せざる程度

S君、

私が述べたところは、一の杞憂に過ぎないかも知れませぬ。けれども私は、文學を道樂としつゝ、何時の間にか其空氣中に沒入して、放縱自墮落な節制なき生活を送りつゝある實例を見る事が多いので、特に直言したのです。其の中の或者は、日毎に何の爲すこともなく、歡樂の影のみ追求して、人生の務めを忘れて居るのがある、或者は、何も出來ないのに、先輩に反抗して、自分から發展の道を遮斷しつゝある、或者は、人道の存在を無視せんとする傾向を示したのがあります。何れにしても文藝中毒の害は、恐るべきものです。

S君、

私は、君が未だ文藝中毒に陷られたとは思ひませぬが、昨今、君が意志の弱くなるのを嘆ぜらるゝに就て、切に美しい君をして、何處迄も眞直な道を歩ませたいと願ふ心からッイ忌憚なく、君に迄、一片の杞憂を申送るのです。私は、永く君が文藝を樂まるゝのを喜ぶと共に、唯、それに中毒されないやうに進まれんことを、蔭乍ら祈つて居ります。

第十二　英雄崇拜の利弊

若き日は去つた。私がカーライルの「英雄崇拜論」に親んだのは、十年の昔である。而かも此の一卷が私に與へた感化は、可なりに強かつた。若き日に別れて、中年者となつた今日も、折々、當時の強き刺戟を回顧せざるを得ない。

英雄!!!

私等は、此の二字に接すると、多種多樣の趣を感じ初める。若し人間を主として云へば、古來數千年の歴史は、英雄の歴史である。英雄の爲した事績が、前後に連續して、歴史の山を作つて居るのである。それ程迄に、彼等は非凡で偉大である。各時代に於ける英雄は、その時代に於ける最大なるもの實力、手腕性行の最傑出せるものである。故に其の

手に依て、一切の難問題が解決さるゝと同時に、種々の文明に貢献する所が多かつた。私等は、第一に此の意味に於て、英雄を渇仰する。

平和的英雄と戰闘的英雄

英雄の中にも平和的の者と、戰闘的の者がある。前者は、主として思想界の新しい領分を開拓し、後者は、專ら實際界の新しい方面を作るのである。私等は、平和的英雄の靜かな仕事の中に、心的苦闘の結果を見る、戰闘的英雄の仕事に、冷靜周匠の謀略を見る、けれども表面から見ると、平和的英雄の事蹟は、概して平凡に近く、色彩に乏しいが、戰闘的英雄の行路には、變化も多く、色彩も複雜である。それ丈に後者の方が、皮相的ならずとも、深く興味を引き易いのである。カントや、ヘーゲルや、ニイチエの生涯よりも、ケーザルやナポレオンの生涯が面白い、けれども平和と戰闘との兩方面と關連した日蓮上人や、ルーテル等の生涯は、ナポレオン以上に興味を引くことがある。

之を中學時代の人々に見ると、概して戰闘的英雄に、先づ親みを感ずるてあらう。日本史上に於ては、太閤や、義經、清正、南洲等に引き付けらるゝてあらう。

英雄崇拜は何故必要なるか

若き日には、感情が熾烈であるから、如何なる學生も、多少、ロマンチックの氣分を持たぬものはない。私も亦中學時代には、左樣した氣分の上から太閤と義經と南洲とを愛した。家康は、存外、好まなかつた。頼朝も亦嫌ひてあつた。今日ては、總べての英雄に全く敬服しないが、さればとて嫌ひなものは、少くなつたのてある。

英雄崇拜!!!

私は、英雄崇拜説に賛するものである。何となれば、現代のやうに、總べての事物の上に秩序が成立つて、何人も部分的に働き、機械的に動くやうになつては、勢ひ其の人物も亦平凡となり、低調となるからである。私は、平凡を蛇の如く嫌ふ、低調を毒の如く恐れる。殊に若き日に於ては、須らく非凡ならんことを力め、高調ならんことに鋭意しなければならぬ。それには、英雄崇拜が必要である。

雄大剛壯の影

人格修養の必要は、餘りに明白である。けれども其の修養の目標として、古來英雄中の一人又は二人を撰ぶことは、向上の機縁として有功なるものであらう。唯、漠然と理想的英雄を胸に描くことは、抽象的のものとなるから、割合に効力に乏しい。若しそれが具體的の英雄ならば、略ぼ其の輪廓が分明つて居るから、之を標準として進むことが出來やう。乃て諸君が英雄崇拜の必要を生ずるのである。

諸君、私は英雄崇拜を説いて、無暗にエラがるのではない。けれども英雄崇拜から來る一種の芳烈な空氣の中に、生々活潑の光を見るのである。雄大剛壯の影を見出すのである。さらぬだに平凡に赴かんとする現代人は、此の空氣に接觸して、先づ其の平凡を打破ることが急務ではあるまいか。社會に於て平凡生活を送るにしても、少くとも其の精神的生活の中に、非凡の分子を存立せしむることが、向上の最大動力となりはしまいか。私は、左様思ふのである。

偉大なる精神生活

此に一種の絶望論者がある。其の説に依ると「私等は平凡である、其の智能に於て、精力に於て、到底、古來の偉人と匹敵することが出來ない、何人も偉人になれるやうに思ふのは、一の誤解である。平凡な人間は、初めから平凡に安んずる方が宜い、之が幸福に進む道である」と云ふのである。彼等は、此の説を根據として、英雄崇拜の空想に過ぎぬことを笑ふのである。けれども人間が、左樣な風に初めから小さくなつて了つては仕樣がない。自己の實力を過信することは、素より宜しくない、之が失敗の原因となる。唯、自己の人格の内容を充實せしめることは、必ずしも惡いことではなく、寧ろ進んで之に努力せねばならぬ。然し小さい平凡な人物を目標とした場合には、自分は、一層小さなものになるであらう。少くとも偉大なる精神生活をなさんとするものは、偉大なる人物に接近せねばならぬのである。

私をして直言せしむれば、現代には、偉大なる人物がない。輕卒な人々は、朝野の權勢家に呈するに「現代偉人」の稱を以てする。けれども其の多くは、私等に比して、少しばかり輪廓が大きく、年所閲歴を經て居ると云ふに止るのである。若し强ゐて擧ぐれば、二三人だけは、辛らうじてあらう。而かもそれ等の人々は、余りに時代が接近して居るため、却て其の眞相が分明らない。噂は噂を生んで殆んど底止する所を知らぬのである。

若し公平に偉人の眞相を知らんとするには過古に遡つて求むるが宜いのである。これ等の人々は、概して其の眞相が比較的に闡明されて居る。即ち安んじて、第一流の人物を求め得るであらう。

不滅の感化

偉大なる人物の爲した事は、不滅の感化を殘して、宇宙の消滅する迄容易に去らない。巴里の誇りは、凱旋門である。之れナポレオン全盛時代に於ける戰勝の光榮を紀念すると共に、ナポレオンの偉大なる感化を語るものである。獨逸のハンブルクに近いフリードリヒルーは、獨逸の誇りである。其處には、鐵血宰相ビスマークの舊居が、今も尙ほ其の廟と共に存して、彼が薨去した日には、多くの書生が此に集るからである。總べて英雄の感化力は、斯くの如く不滅である。之れひとり其の凱旋門や、舊居に止らずして、彼等が大事に當つて示した勇膽、智畧、精力、愛國の赤誠は、後人をして奮起せしむるに余りある。我日本は豐太閤を有し、義經を有し、日蓮上人を有し、楠公を有し、謙信を有し、大石良雄を有し、清正を有し、時宗を有し、政宗を有し、南洲を有するがために、私等は如何に其の低調に傾かんとする精神を高めることが出來たらう。新日本の飛躍は、之等の英雄に吹込まれた感激によつて成立つたと云つて宜い。私は、英雄崇拜を讃美する一人である。

英雄の短所

けれども此に注意しなければならぬことがある。第一は、英雄必ずしも完全でないと云ふことである。例へば、近頃、ルーソー二百年祭が擧行されたが、彼は、精神界に於ける一個の英雄兒たるに關らず、其の品行は、全く醜惡に近かつた。勿論、境遇や、運命が之を手傳つたであらうが、彼に强き自制力を缺いたことを蔽ふことは出來ぬ。彼は、家庭に於ても、經歷に於ても、其の心事に於ても、あらゆる人間の弱點をサラケ出した趣がある。就中、彼が目に一丁字なき愚劣な女を娶つて五人の子女を生ませ、之を捨てゝ、養育院の厄介者たらしめた如きは、後人の指彈

する所である。

斯うした例は幾何もある。ナポレオン盛時の外交家として、又た復舊王朝の使臣として佛國のために大功を樹立したターレーランの如きは、識見、膽才に於て超群の趣がある。けれども彼は、他人の妻に通じて、元の夫と手を切らせ、之を自分の物にしたので、後世の人々から不德漢なりと罵られて居る。其の他、ビスマークの粗暴なことや、ナポレオンの怒り易いことや、ショーペンハウエルの喧嘩好きなことや、一々例を擧げるに遑がない程である。英雄も亦神ではない。總べての方面に缺點のないものは、僅少である。其處が却て面白いのである。唯、斯うした病的方面のあることを知つて、其の長所を學ぶと共に短所を摸せぬやうにすれば宜い。

內部生命に觸れよ

第二は、英雄も亦時代の影響から脫することが出來ない。平和時代の英雄と、騷亂時代の英雄とは、自然、趣を異にするであらう。自分の崇拜する英雄の云爲を熱愛するの餘り、時代精神を解せずに、其の儘、之を學ばうとするのは不可ない。今日に適應してゆくべきである。即ち其の皮相の言行よりも、內部生命に觸接して、捉えた心の精髓を、時代の上に適當な方式に依て發揮せねばならぬ。今日に於て、戰國時代の英雄的行動を執るのは、勿論、時勢と相容れぬのである。時代に媚びる必要はないが、時代の形式を適宜に參酌することは、自分の精神を實現するに就て、多くの便宜を與へる。

第三は、其の言行に於て高潔偉大なる人物を崇拜すべきである。之

に就て米國の英雄ルーズベルトは、斯う云つて居る「如何なる米人も、高祖ワシントン及リンコルンの高潔な言行に依て、多大の感化を受けぬものはない。何人も一度此の十九世紀に於ける偉人ワシントンのゲッケイースブルグに於ける演說、又は第二回の就任演說を讀み、それからリンコルンの多年の長征と雄偉な政治家としての性格に想到すれば、物質上の繁榮に依て享くることの出來ぬ或物のために、善良な感化指導を受けるであらう」と。我國の高僧中には、高潔超卓の大人物がある。多少の缺點はあつても、豐太閤のやうな壯快な人物もある。諸君は、東西の英雄を通じて、其の最も崇高偉大なる人物を崇拜すべきである。唯、それが平和的なると、戰鬪的なるとは、一に諸君の嗜好、趣味に一任するより他はない。

時代は平凡化し、低調化しつゝある。敢て英雄を氣取る必要はないが、今のやうに凡人ばかり多くては困る。せめて精神的だけでも英雄的分子を包含するやうにしたい。利害得喪の外に起つて、英雄的精神の閃きを見たいものである。諸君、請ふ共に一夜、英雄を論じて曉迄趣深き數時間を送らうではないか、而して其の中から强い感激を得やうではないか。

"The search after the great men is the dream of youth, and the most serious occupation of manhood."

第十三　天才的青年と凡才的青年

若し世の中に最も多望なのは、何であるかと云へば、第一に青年の未來を擧げなくてはならぬ。既に社會に出て稍戰ひに疲れた中年者に比較すると、青年の日の長き未來の樂しさは、如何であらう。更らに之を老年の人々に比較すると、之は東天に微紅を潮した頃のやうな爽かさがある、彼は、落日が沈みかゝつたやうな淋しさがある。旭日の將に昇り初めんとする時の喜悅!!!

中學生諸君、

諸君は、青年の中の青年である。感情の著々しさに於て、思想の新鮮な點に於て、水々した元氣の漲れる點に於て、諸君ほど祝福されて居るものはない。諸君は一樣に幸福の兒である、多望の子である。けれども此に唯一つの關心事がある。それは(杞憂に過ぎないのであるが)諸君の中に二つの傾向から來る歡喜と寂寥との成果に就いてある。

天才派の特色

諸君、私は、諸君の聰明と强健とを信ずる、諸君の才學と有德とを信ずる。けれども廣く世の中の學生諸君を見渡すと、其の天稟傾向の上に、自然、優劣の差を存することを認めねばならぬ。

此に或青年の一團がある。之等の人々は、才學、品質の上に、先天的に優れた特色を持つて居る。勿論、此中には、奇拔なる例外がある。ベーコンが云つたやうに「フキートンの馬車は唯一日走つたばかりである」との實例を示すものである。ルベックのハイヂケンと云ふのは、二才で新舊聖書の大部に通じ、三歲の時、ラテン語及び佛語を巧妙に話し、四

歳には、寺院の教へと歴史とを學んだが、五歳になつて夭折した。之を除外例として見ると、十二三歳頃から特殊的に目ざましい發達を示すものが、割合にある。詩人タッソは十歳の時、既に短歌を作り、ゲーテは、少年時代に早くも、獨、佛、伊及びラテン、ギリシャ五ヶ國語を以て作文の技倆を現はした。ベーコンや、バイロンの如きも、夙に天才的傾向を示したのである。政治家、軍人、學者の中で、學校時代から才名を馳せたものが隨分史上の名士中にある。之等は、天才派に屬するものである。

凡才派の特色

處が此に別な一團がある。之等の人々は、決して遲鈍でも優柔でも、何でもない。唯普通の程度に於て、其の才能を示すものである。史上の英雄中にも、學生時代には、平凡で他奇なかつたものを見る。スコット(歴史小説家)の如き、グラント將軍の如きは、其の一例であらう。カーライルは、スコットに就て斯う云つて居る。「エヂンバラの中學に二少年が居た。ジョンと云ふ方は、始終、行儀が宜く、擧止も溫和しく見えた。處がウオーターと云ふ方は、見るから汚く遲鈍な風があつた。其の後、ジョンは、ハンター街のベリー、ジョンとなり、ウオーターは、世界のサー、ウオーター、スコットとなつた」と。スコットは、中學時代には寧ろ凡庸を以て輕視されたのである。グラント將軍も亦、其の學生の時には諒解の遲い方で、敏捷な聰明らしい點が見えなかつたので、彼が三十八歳迄は、何人も「平凡に終るであらう」と推測した位であつた。之等は、凡才派に屬すべきものである。

天才と凡才との行末

私は、此に諸君に向つて、何人が天才派に屬し、何人が凡人派に屬するかを申し上ぐることが出來ない。けれども何時如何なる處にも、此の二大別の存することは明白である。此に假りに中學生の一團ありとせよ、其の中の十人は、天才派で、百九十人は、平凡派に屬するとせよ。前者は、人生の成功者、後者は社會の劣敗者と云へやうか。之れは、到底、豫言し得ないのである。時には、其の天才派が悉皆、中途に於て敗れ、凡才派の多數が成功者とならぬとも限らぬのである。

嚴密に云へば、學生諸君の中には、天才、穎才、凡才の三種がある。天才は、凡ての點に於て異常の才能を示し、穎才は、水平線より少し拔け出て、凡才は、僅かに水平線に達するのみである。處が天才者にして、成功したものは存外に少い。一は其の才能を頼んで怠るからである。或は早熟に失して、直ぐに伸びなくなつて了ふ。穎才は之に比すると、割合に前途がある。而して天才の如く失敗はしないが、之も油斷すると、中年時代に入つて、全く平凡化して了ふのである。

けれども凡才の人々は、假令、一時輕視せらるゝとも、決して自己の才能を恃むことがないから、遲緩ではあるが、年所と共に發達してゆくのが多い。即ち其の人に油斷がないからである。斯うした方面から、後の英雄を出し、豪傑を見出すことも往々ある。諸君は、何れを欲せらるゝであらう。

秀才立身の方法

私は、中學時代に於て、極めて優れた成績を示した秀才が、大學に入つて漸く衰え、愈よ社會に出るに及んで、遙かに昔の同窓より遲れて了つた實例の多くを見た。學校時代の秀才は、必ずしも社會の秀才でない

と云へる。勿論、秀才を以て押通す者もあらう。けれども、挫折するものも相應にある。之等、挫折する人々は、最初のやうな新鋭の意氣込を以て、萬事に當らぬからである。即ち次第に其の身心にスキが出來たのである。學校時代に「秀才」と唱はれたことが、彼の自負心を增長させて、彼自らの根幹を衰微せしめたのである。

右の點から云へば、假令、超凡の天才であつても、一日も油斷することは出來ない。總べての學課が滿點に達して、品行が優秀であつても、尙ほ自ら反省して、心の締りを固くし、何處迄も進歩の跡を追うて突擊しゆくが肝要である。所謂「穎才」と稱せらるゝ人々も、矢張、絕え間なき努力を以て進みゆかねばならぬ。賴山陽の如きは、慥かに幼年時代から天才的傾向を示して居た。けれども彼は其の日〳〵の吾に滿足せずに、人一倍の努力を繼續して、不朽の大著を殘したのである。彼は其の才を恃まずして、努力を恃んだ人であつた。

凡才出世の捷徑

凡才派を以て目せられ、自分も亦「左樣ではあるまいか」と危惧する人々は、決して失望するに及ばない。記臆力の鈍いために、成績が良好でないのを嘆く人や、如何に努力しても、思ふ通りに學科を諒解して、其の心髓に徹し得ぬ人や、試驗に際して、思はぬ失敗をする人達は、感情的に悲觀することを免れないにしても、其の前途は、輝く光に照らされて居るのである。諸君が、人一倍の努力を續けて止まなかつたら、年一年、自分の缺點を補充してゆけるのである。或程度迄は、之に依て穎才派に追付くことも出來よう。天分の多少よりも、寧ろ精力の多少に依て、優劣が決せらるゝのである。學校にある時も、學校を出てからも——

一日の油斷は一日の退歩

諸君、人間の一生は、努力の繼續である。諸君の多くは、優れた天質を有せらるゝであらうが、さりとて之を恃んで油斷する事は出來ない。一日の油斷は、一日の退歩である。一日の努力は、一日の進歩である。諸君は、先づ心身の剛健なることを力めて、其の境遇に於て爲すべき事は、根氣よく完成せねばならぬ。斯うした用意の下に進むものは、途中に衰えることがないのみならず、年一年、其の實力の充實しゆくを見るであらう。即ち學校の勝利者は、又た社會の勝利者となるであらう。アイザーク、ニュートンは、引力の發見者として有名であるが、彼は、曾て斯う云つた「私の精神上の作用が、他の尋常人に優れた處ありとすれば、必竟、研究上に於て根強い忍耐力を有するからである」と。心身をあげての根強き努力！、衰えざる精氣！之れ諸君をして凱歌を奏せしめる原因である。私は、諸君と共に此の事を記臆したい。

第十四　病弱を歎く厭世的青年へ

G君、

御手紙の趣、了承いたしました。貴兄が田舎に引籠られてから最早二ヶ月ばかり經過致しました。大分、御元氣を回復された樣子ですが、始終、沈欝に陷つて仕樣がないとの仰せには、深く同情します。凡そ世の中に、身體の具合の惡い程、不快なものはありませぬ。如何に美しい聲色味識に接しても、健康な人が享ける丈の樂しさの半分も、享樂し得ないのです。現に私の如きも、矢張、病弱の一人です。之がために、始終、苦められて居ます。如何にかしないと、不可ないと思惟しながらも、愚圖々々、其の日〳〵を送つて居るのです。貴兄が沈欝に陷られたに就ても、略ぼ其の心持の苦さを察することが出來ます。病弱の私等には人生が苦い。

病弱より來る惡影響

私は、病弱に就ての苦痛を、二十年間、嘗めたのです。今日も、矢張、此の境を脱することが出來ませぬ。先天的に弱い處へ、四圍の事情に壓迫されて、體育をも閑却したので一向、肥えないのです。それに酒に耽つたので、甚だしく胃腸を壞はしました。今は、容易に取返へしが付かぬのを嘆くばかりです。斯うした生活に呻吟したのですから、貴兄が沈欝になられたのは、止むを得ぬことと信じます

けれども御互ゐに注意せねばならぬのは、病弱より來る種々の惡影響です。第一に根氣が薄くなり、意志が弱くなることを免れぬやうです。少くとも、此の實例は、相當にあります。自分では、充分、根氣強く或

事を仕遂げやうと思ひ乍らも、身體の具合が惡いために、飽きつぽくなつて、一時間以上は、集中力を持續することが出來ませぬ。

此樣な風であると、進んで或目的のために生きた社會と戰はうとする氣も出ない。兎角引込思案に傾いて、無爲平安に憧憬れるやうになります。それかと思ふと、一方では、怒り易くなり、氣が短くなつて、無暗に欝ぎ込むやうな傾向を呈するために、社交上にいろ〳〵の不都合を生ずるやうです。溫厚な貴兄には、勿論、以上の欠點はありますまい。私は、それを確信します。唯、病弱と云ふことに就てありの儘の考へを述べた迄です。而して之は、私の經驗から感得した點もあるのです。

痼疾に惱まされし偉人

病氣から來る惡影響は、獨り凡人の上のみならず、英雄の上にも現はれて居ます。例せば、ナポレオンは、小供の時に激しい神經病に惱まされたので、成長してからも、顏面神經痛に苦み、何事につけても、怒り易い傾向を呈しました。文豪カーライルは、胃病に苦んだので、之も甚だしい癇癪持ちで、隨分、夫人を困惑させました。如何なる英俊の士も病には克てないのです。

さればとて、私等は、其の儘、病弱に負けて了つて何事も一歩遲れることは、好ましくありませぬ。殊に負け嫌ひの貴兄の如きは一段、此の感じが深いでせう。若し病弱のために、自己の才能も、技藝も、長所をも埋沒させるやうなことがあつたら、其の父母に對して濟まぬと云ふよりも、自分の衷心に於て甚だしい不滿を感ぜずには居られぬのです。して見ると、私等は、如何なる場合にも、健全なるものに、一歩をも讓らぬ丈の活動振を發揮せねばならぬのです。

健康者の弱點

G君、

健全なるものが最後の勝利者であることは或程度迄事實でせう。けれども健かなものが、悉く勝利を得るわけには行きませぬ。彼の勞働者の如きは、何れも頑丈な體格を有して居るに關らず、何時でも他の顧使に甘んじてるではありませぬか。假令勞働者でないものでも、肥滿した體軀を有し乍ら、碌々たる舊阿蒙の域を脱せぬのが澤山あります。若し忌憚なく云へば、健康者にも、いろ〳〵の弱點があります。それは、彼等が健康を誇る所から來るのです。胃腑も強く、心臟も強いために、時として暴飲暴食することを何とも思ひませぬ。或は二晝夜も通して、仕事に熱中したりする。それでも、割合に惡影響が來ないと、愈よ得意になつて、跳ね廻り飛びまはり、何時も皮相の活動を繼續して、心内の苦悶を經驗しないのが多いのです。勿論、其の人は、それで滿足でありませう。けれども、身體の強健と共に、精神の強健に努力せぬ人は、片輪です。強き反撥力ある心！それによつて、強き身體を動かさねば、目醒しい善良な結果が現はれませぬ。必竟、強い身體を有するものは、心が浮々するために、反省の動機を逸し去るのです。

病中の覺醒

G君、

或精神家は、病中の趣味を說いて『幽閑靜寂の極致である』と云ひました。日夜、風塵に奔走して、靜かに我の心の姿を振かへることを忘れて居た時、病氣のために、一切の俗事から離れて、靜かに床上に横はりつゝ、

いろ〳〵の想像を周らすと、平生、抛つて居た心靈上の重大な問題に、ヒタと逢着し、それによつて、混迷に陷つた俗惡な心が、急に醒覺することがあります。此の時の味は、形容が出來ぬほど深く且つ尊い。此の意味に於て病氣は、冥想的哲學の母であると云ひたい。

けれども之は偶まあつて宜いのです。何時も病氣のために屏息して、冥想にばかり耽つて居ることは、到底耐え得ない所です。私は、唯、輕い病氣が全然、憎惡すべきものでないと云ふ迄です。

精神の力を以て病氣を征服す

G君、

私等の如き病弱者は、全く絶望のやうですが、さりとて、自暴自棄する丈の勇氣もないのです。若し深酷に考へると、病弱者なればとて、其の精神迄弱いと云ふことは出來ませぬ。俗に「彼の人は氣で持つて居る」と云ふが、恐らく明治の病弱者にして英雄たる小村侯、陸奥伯の如きは、氣を以て生命をつないだ人達でせう。一國外交の衝に當つて、策略縱横、少しも屈托する所なく、激務に處して悠然たりし所以は、氣を以て病を征し、氣を以て總べてに當つたからです。「健康なる身體に非ざれば、健康なる精神宿らず」と云ふのは偏した考へである。心身は双闘であるが、矢張、精神の力が、肉體の力よりも強いのは事實である、コッホ博士が、コレラの黴菌を呑んで而かも之に感染しなかつたのは、精神力を以て黴菌を克服したのです。精神が強ければ、肉體を壓倒することは何でもない。即ち之に依て、病弱に伴ふ弊害を一掃することが出來ませう。之は少し云ひ過ぎたやうですが、其の半ばを防ぐことは可能です。

明治實業界の先覺澁澤男は「青淵百話」に於て斯う云つて居られる「一

體、人は氣で持つもので、氣即ち精神の作用如何により身體は或程度まで左右されるものである。彼の小心翼々の人が、何か難問題に逢着した場合、夜分も眠られないとか、或は食慾が減退したとか云つて、殆ど半病人のやうになる者もあるが、是は即ち身體が精神の爲に衰弱した好適例である。斯くの如く精神の力といふものは實に恐しいもので「病は氣から起る」といふ世の諺には眞理があると思ふ。人は常に精神さへ確乎として居れば、身體も之に連れて自然に壯健になるやうである」と。澁澤男は、今年七十三歳とか聞いた。即ち男は、長壽者に近い方です。

病を壓服せし名士

G君、

病氣に打克つには、精神力を練り鍛えることが必要です。即ち如何なる障碍が起つても、之に耐えると共に、之を征服すると云ふ意氣込が始終、なくてはならぬのです。頭腦が痛んでも、腹痛がしても、「何此の位の事が」とヂッと耐え忍ぶ力を養ひ、進んでは、之を壓倒する丈の蠻氣を蓄へることが、やがて萬病に克つ原因になるのです。

更らに積極的に云へば、樂天の氣象を以て萬事に處する事が第一要件です。何日でも、クヨ〳〵考へ込まず、女々しい心を起さず、力めて暗黑面よりも光明面を見るやうにして快活に振舞へば、多少の病氣は、其の蔭をかくして了ひます。

桂公と共に外遊の途から歸つた後藤男は、種々の批評がありますけれども、兎に角一方の俊傑に相違ありませぬ。男は、英姿颯爽たる人の樣であるが、余り健康體ではない。曾て臺灣に居た頃、赤痢に惱まれて

以來、絶えず膓の故障があつて、少しの刺戟でも、膓を害する位です。それに鼻にも故障があつて惱みが多いのです。而かも男は、半日直立した儘、數十人の客に接し、毎日之を繰返へして疲勞もせぬのは、必竟、氣を以て病氣の分子を克服するからである。「何此の位の事が」と云ふ意氣込が、男の全身に溢れて居るからです。精神の內容が散漫でなくて、統一が付いて居れば、少し位の病氣は何でもないのです。平生、病弱であつても、強健の人と併行して、事を爲し得るのであります。

病弱者が強健となりし實例

G君、

私は、病弱必ずしも悲觀するに足らぬことを述べました。けれども一歩轉じて、強き精神力に伴ふ強き肉體を作ることが出來たら如何せう。御互のやうな病弱な身體を根底から改革して、張りきれるやうな發達を具現するやうにしたら如何なに愉快でありませう。セシール、ローヅは、羸弱な身體を持つて居りました。彼は健康體とならんがために、乃兄の跡を趁うて南阿に赴き耕牧の生涯に入つたのです。之に依て彼は見ちがへるばかりな偉丈夫となりました。大儒貝原益軒は、極めて病弱でありましたが、先哲の衛生訓數百條を筆錄して之を服膺した爲め、八十五歳の長壽を得ました。薄弱な身體を轉換して、剛健な身體とすることは全然可能です。

若し貴兄が人文に貢献すべき大事を完成せんとするならば、充分な積極的衛生法を實踐せねばなりませぬ。それには、身體を鍛えること、規律を嚴守することが肝要です。福澤翁は此の點に最も意を用ゐられました。翁は、晩年、日課を定めて、毎日午前四時半に起床、塾生を伴う

て近郊を散歩すること一時間余、歸つて六時頃に朝餐を喫して後、一時間ばかり各新聞を一閲し、それから晝餐迄は、筆を執り書を讀み、或は客に接せられました。午後は一時から二時迄平安な眠りを執り、醒めてからは矢張執務、四時半から米搗や居合を試みて充分運動されたのです。米搗を終つて入浴、晩餐後、家族と談笑して午後九時就眠されました。之が日毎に印を捺すやうに實行された爲、相應の長壽を保たれたのであります。

最近、健康法に就ては、いろ〳〵の名案が提供されて居ります。御互ゐに之を試みて、強き精神と共に強き肉體を得やうではありませぬか。思はず無遠慮に私の考へを申上げました。貴兄よ、何卒沈欝から醒めて、先づ快活の人となつて下さい。少くとも快活の氣分を振ひ起して下さい。私は、切にそれを祈ります。

"One of the best preventives of age is enthusiasm and interest in affairs of the day"

"Keep your mind young by fresh, vigorous thinking, and your heart sound by cultivating a cheerful optimistic disposition."

第十五　遊蕩の空氣に憧憬るる學生へ

諸君、私は固く信ずる。諸君の中には、遊蕩の空氣に憬憧るゝやうな弊害の存在せぬことを。けれども私が曾て見た一學生が、輕浮な文學思想に浮かされて、放縱な生活に陷つたことがある。私は、其の學生に對して、私の飾りなき所感を書き送つた。左の一篇が、それてあります。

色彩と音樂の世界

M君、

私は、近頃、妙な噂を耳にしました。恐らくそれは、眞實てないと思ひます。それは何に關してであると考へられますか。貴兄に關してであります。溫和な眞面目てあつた貴兄が不圖とした事から、花柳界へ足を踏み入れて、昨今は、外泊されることが多いとのことてす。私は如何しても事實であると思へませぬ。

私は、貴兄が少量の酒を愛せられることは知つて居りました。然しそれも交際上、止むを得ない場合の他は、餘り飲まれぬやうに承知して居ります。又た或時、貴兄が吉原の方角を知らぬと申されたことを記臆します。唯貴兄が折々愛誦する文藝雜誌を透ほして、色彩と音樂との世界に一味の愛着を寄せられたことは、特に私の頭腦に印象されて居ります。若き小說家の手になつた小說の中に、遊蕩の面白味を濃厚な油氣のある筆て、面白く書いてあるのが多い。彼等は、單に唯美主義に立脚して、斯うしたものを書くのてせうが、之を讀むものが、青春の血に燃えて居る時は、時として不知々々、色彩と音樂の世界を覗いて見たくなるものです。けれども健實な貴兄は、自分の生活と、小說から得た

空想とを、ゴッチャになさるまいと存じます。其の貴兄が、如何して惡い噂を立てらるゝやうになられたか。私には分明りません。私は、矢張、貴兄の健實を信じます。

青春の危機

M君、

此に貴兄に許して戴きたいことがある。年齢の上から云へば、兎も角、私は、十歳ばかりの年長者であります。才學、識見から云へば、到底、貴兄に誇るに足りませぬ。然し年齢が幾何か多い丈に、社會上に於ける經驗に就ては、分量的に少しばかり貴兄よりは豐富であらうと思ひます。乃て私の經驗上、話すことに耳を假して戴きたい。

誰でも云ふことですが、十五歳から二十歳前後にかけては、總べての働きが勢力を増す丈に、又たいろ〳〵の危險が伴ふやうです。之が所謂「青春の危機」であります。之は、中學生時代に、心身に對して、生理的、心理的の變化を生ずるからです。身體の方から云へば、躰量の増加、骨格筋肉の發達が殊に著しい。同時に動脈が小くなつて、これと反比例に心臟が大きくなり、肺臟の胸廓も亦大きくなる相です。心身双關である以上は、精神方面にも、大なる變化を見ます。吾が前に展開された萬象に就て知識を得んとする傾向が著しく働き出し、宗教的、道德的の考へも目醒めかけると共に、異性に對して、憧憬思慕を寄せる傾きが多くなるのです。斯うした複雜な作用が、感情を基點として波立つのです。而して各自は、其の境遇や、運命に依て、陽性的色彩を呈したり、又は隱性的調子を帶びたりするのです。

此樣な風に、身心の上に一大變化を生じ、驚くべき革命を來たすので

すから、勢ひ大きい動搖を生じます。それが幸ひに宜い意味に於ける動搖ならば差支えはありませぬが、惡い意味に於ける動搖ならば、特に警戒せねばならぬのです。「青春の危機」は、人の一生を支配するやうてあります。少くとも、私は、左樣經驗しました。

墮落の第一歩

M君、

私は、此に懺悔せねばならぬことがあります。それは、私も或若干の月日を「青春の危機」に捕へられて、空漠の間に過ごしたことです。酒と戀との誘惑に、一時、何事も忘れて、放蕩に耽溺したことを思ふと、鋭い良心の呵責を感じます。それ丈に、私は、私よりも後から進む人々の身の上を打案じます。それに日々、新聞紙上に報道せらるる所を見ると、中學時代の青年が、戀情や、色慾のために墮落して、取返へしの付かぬ過失をなすものが多いやうです。斯うした出來事に對して、私は、其の人を責めるよりも、寧ろ痛切に同感せざるを得ないのです。

我國に於ける社交界は、明治に入つて、多少、歐風を加味するやうになりましたが、それでも男女交際に就ては、概して封鎖的てあります。此の事に就て、一時、種々の議論を生みました。けれども依然として封鎖的に近い狀態にあります。唯、或特殊的部分に於て、稍開放的の趣を見るに過きないのです。「若し從來の習慣から一轉して、大膽な開放主義に入る時は、弊害が續生するてあらう」との主なる理由が、勝利を占めたのです。之は、日本の女子が、著しく情の發達せる割合に、智の發達が之に遲れて居るより來る結果でもありませう。男子の中にも、感情的なる色彩を帶びたものが多いのにも依りませう。何れにしても、日本の

男女交際は、概して封鎖的です。

如上の一事が、中學時代の若き人々に取つて、甚だしく窮屈であるとは明白です。稍開放された男女交際にも、嚴重な監督が附いて居るから、ウッカリしたことは、勿論、云へない。双方の直情をさながらに表白することも出來ない。從つて異性に對する憧憬思慕の情緒が烈しく動く時代に、唯辛らうじて戀愛小説を繙讀して、滿足するやうなものも出て來ます。其の位は未だ宜い部分かも知れません。それが甚だしくなると、自由なる男女交際に憧憬れる結果、色彩と音樂との別天地に突入せんとするに至るのです。「青春の危機」は此にあります。墮落の第一歩は、主として此から來ます。

遊蕩者の懺悔

M君、

私は、曾て遊蕩者の懺悔を聞いたことがありますが、最初、妓樓に足を踏み入れた時は歡喜の心と、好奇の情とが伴ふものです。けれども其の歸途は、必度、良心の呵責に逢つて、過ぎ去つた一夜の醜き行爲を恥づる氣分が多くなります。若し之を好機會として、再び色情の巷に近付かなければ、無事に濟むのです。然し或期間を經過してから、唯一度の歡樂の匂ひに心を溶かして、屈辱の念を抱きつゝ、色慾の天地に入ると、今度は、稍良心が摩痺して、漸く平氣な心持になるさうです。既に此の誘惑に囚へられると、三度となり、四度となつて、大酒家が、酒を片時も手離さぬのと比しく、遊里の奴隷となることを光榮として、毎日色彩と音樂とに親まぬと、心淋しくなるに至るのです。斯うなれば、全然墮落です。

それでも墮落の結果、心身を害せぬなら、未だしもであるが、必度、心身の上に惡い影響を及ぼします。それが恐しいのです。神經衰弱の如き產物は、之に依て生ずるのです。放蕩に身を持ち崩すと、總べてが不規律になります。食事でも、飲酒でも、學事や、研究でも、自儘にやるやうになつて、而かも夜更かしをする事が多い。それ等が、最初は、甚しい徵候を見せぬが、漸を追うて、其の毒が次第に遊蕩兒の心身に喰ひ入ります。それと心付く頃は、恐しい神經衰弱が見舞うて居るのであります。斯うなれば、もがいても、焦慮つても仕方がありませぬ。

私は、貴兄に此樣な話をするのを快く思ひません。或は貴兄の感情を害しはせまいかと危ぶまれます。けれども之は話の序に申上げたのですから、決して氣にかけずに聞き流して戴きたいのです。

露骨な感想

M君、

聰明な貴兄は、私が今迄述べたことに就ては、夙に御承知でありませう。唯、私は、之から發展しようとする貴兄に就て、妙な噂を耳にしたので、斯く露骨に私の感想を申上げました。それも貴兄の前途を憂慮した心から湧き出たのですから、私の心の影として御覽下さい。何れ御目にかゝつて、ユル〳〵貴兄の御話を承る機會も近いでせうから、余は其の節に讓ります。

Zopyrus, the physiognomist, said, "Socrates' features showed that he was stupid, brutal, sensual, and addicted to drunkeness." Socrates upheld the analysis by saying: "By nature I am ony restrained and vanquished by the continual practice of virtue."

第十六　觀劇趣味と相撲趣味

自然にも四季の推移がある。花の季節、青葉の季節、黄葉紅葉の季節があるので、自然も其の機能を旺んならしめ、人間も亦、之に依て單調を忘れるのである。私等の生活も、版で捺したやうに定つたものとなれば、如何に根氣の宜いものでも倦怠して了ふてあらう。始終、變化を求むることは容易でないが、適當の時期に變化を求むるのは、何人にも必要である。

諸君、諸君が勉强を繼續さるゝことは、素より結構である。けれども時々、休養しないと、根氣が盡きるであらう。乃て心機轉換の要を見る。それには、旅行して、境地の變化を求めるのも宜いが、都會にあるものは、惑溺せざる程度に於て、無害の快樂を見出すべきである。

新しい芝居

快樂にも、いろ〳〵ある。然し無害てさへあれば、何れを追求しても差支えはない。唯、各自の性情氣質に依て、其の欲する所を異にすることはあるが、之も任意とすれば宜いのてある。其の中、相撲と芝居とは、可なり興味もあつて、而かも左程の害はない。芝居は其の狂言に依て、有害な感化を及ぼさぬとも限らぬが、斯うした種類を避けさへすれば、何てもない。

固陋なる家庭に於ては、芝居と隔離することを以て、一家の風氣の肅正を確保し得るかのやうに、狹い量見に囚はれることがある。勿論、今日は、此の傾向も余程癈れたてあらう。それに在來の芝居が、新時代に適合せぬため、新派劇なるものが起り、漸く物になりかけて一頓挫したのて、更らに藝術上から見て清新獨創の趣致ある芝居を要求するやうになつた。殊に此の氣風は、新しい教育を受けた學生諸君の間に旺んてある。今や芝居は革新の時期に入つて、絶えず動搖して居るのてある。

けれども此には、此の問題を詮索する丈の餘裕がない。差當つての必要は、諸君が劇界に於ける意味ある新運動に深い同情を寄せて新興藝術の發達に對して、間接に應援を與へることてある。新教育を受けない人々は、多少、新しい時代の感情、思想を理解しても、根底から之に動かされない。それは、年月の關係、習慣の惰勢に依るのてあらう。諸君は此の點に於て、深い親みもあれば、理解もある。諸君は、有望な新しい芝居に向つて、應援するのが至當てある。所詮、諸君は、新しい藝術の味方てある。

觀劇に就ての注意

現在、諸君が見るべき芝居は、極めて少いのである。其の多くは、興行法に於て、帝國劇場に壓倒され乍らも、尙ほ其の迷夢の束縛から脫しようとはしない。殊に其の演ずる脚本に至つては、千篇一律の淺薄に近いのが多いやうである。即ち其眼前の商略から、止むを得ず、Conventionalist となつて居る樣子である。從つて新しい芝居、眞に面白い芝居を見ることは、むつかしい。偶まそれがあつても、年二三回に過ぎないのである。「心細い」とは、斯うした狀態を指すのであらう。

けれども若し諸君が、新舊兩樣の芝居に亘つて、時々見ることがあると假定したら、藝術的に價値ある芝居は、尊敬の念を以て、靜かに藝術的に味ひ、且批評せねばならぬ。而して其の觀劇趣味の向上を計ることが必要である。唯、現在、藝術上の匂ひ高きものも、大底、歐洲近代劇の摸倣が多いのは、極めて咀ふべきであるが、それ丈は、暫時、辛抱せねばならぬのである。

若し諸君が在來の舊套に甘んずる芝居を見る場合は、藝術上に於て價値ある洗錬された型物を除いては、單に社會生活の一現象として、其の表裏を觀察する積りて見るが宜い。それならば、何等かの暗示を得るかも知れないのである。唯、それ丈である。

一種の美觀

私は、相撲通ではない。けれども相撲の趣味を愛する一人である。諸君の中にも、相撲好きの人が、可なりあるやうに思はれる。相撲を、藝術的に見ることは出來ないが、力士の肉體美と其の質朴剛健なる點は

學生諸君の心を動かすであらう。西洋から歸つた人の中には、日本人の體格が余りに貧弱短少で顏の血色も甚だ宜しくないと慨いたやうに記憶する。此の點では、流石に御國自慢の私等も、辯解の仕樣がない。又た明治十年前後に生れたもの、或は其の以前に成長したものは、在來の習慣に制せられて、體育を怠つたので今更、如何することも出來ない。體格の完美と顏面の立派さとは、之を未來の小國民乃至現在の中學生諸君に期待するより他はないのである。

唯、此の際、破格的に、肉體の發達を具現して居るのは、力士の一團である。彼等は、血色も宜い、體重もある、骨格も優れて居る。其の堅實に發達した赤裸々の姿は、一種の美觀である。それが先づ快い感じを與へる。

實力の爭ひ

諸君、今の世の中は、或程度迄、情實の世の中である。或は閨閥に依り、或は財閥に依り、或は藩閥に依て立身するものが多い。斯うした閥に依らぬものは、假令、出世しても大きい出世が出來ない。即ち或程度迄は、實力の競爭であるが、それへ情實の力が加はつて來るのである。之れ有爲の人士が、常に痛嘆して止まぬ弊害である。

處が相撲には、殆んど情實がない。八百長のやうなことも稀にはあるが、大體に於て、實力の競爭である。若し大力士たる素養があれば、若くとも入幕の榮を得られる。而かも其の力爭が、土俵の上で忽ち決せられるのであるから、之れ程痛快なことはない。八百長さへ除けば、キビ〳〵したものである。要するに相撲の趣味は、徹頭徹尾、男性的であ

る。

惰弱の氣を一掃す

文明の生活は、稍もすれば、人間を惰弱ならしめる。物質上に於ける種々の發明に依て身體を勞することが少くなると同時に、生活難の潮流が激しく押寄せて、何れも匆忙たる口腹の爭ひに疲れて了ふ。此の際、剛健、簡易、質朴の氣風を吹込むことは、非常に必要である。

相撲は、何處かに元始的な質朴さと、男らしい剛健の趣味を含んで居る。大力士が土俵の上に現はれて、風雲を捲起すやうな勢で、秘術を戰はすのを見ると、流石に雄壯の氣に打たれざるを得ない。即ちともすれば、惰弱に傾かうとするものに向つて、適當な警醒を與へる力がある。斯うした空氣の中に投入して、萎靡せる元氣に鞭つのは宜いことである。

學生の一團には、相撲を愛して、天狗相撲を試みる人々がある。私は、極めて面白いことであると思ふ。放蕩の生活に入つて、心身を損ずるよりも、斯うした道樂によつて、總べての誘惑から逃れることが出來やう。諸君の滿ち〳〵た鋭氣は、其の出口を此に求めて適當の快感が得らるゝと共に、筋肉の發達と心意の快暢とを享受するであらう。野蠻かは知らぬが、私は、相撲を讃美する一人である。

適度に樂め

私は芝居(非藝術的ならざる限り)も好きである、相撲も好きである。單調な文人の生活を送る間に於て、旅行の他には、相撲と芝居とに依て、精神上の安慰を得る場合がある。勿論、之に惑溺して了ふ程ではない

が、適宜に見物して、疲れたる氣分から、心機の一轉をなし得ることを喜んで居る。諸君も、之に惑溺しないで、學業の研讃に累を及ぼさぬ程度に於て、之等の樂みを受け入れるのは、決して惡くないであらう。少くとも、諸君の疲れを休める丈の功果を示すであらう。私は、諸君と共にユックリ相撲と芝居の趣味とを論じたいと思つて居る。

第十七　無作法を咀ふ

近頃、或學者が歐米を一週した紀行文の中に、斯う云ふことが記してあつた。『英國のハロー學校を訪ふた際、校長の後から來た生徒が、脫帽して、校長に敬意を表した具合が、何となく「弟子は三尺距つて師の影を踏まず」と云ふ趣があつた』と。實際、私等が村塾に居た處は、之を實行して居たのである。處が現在の我學校に於ける師弟の狀態は如何であらう。師匠も師匠だが、弟子も弟子ではないか。けれども、師匠が惡くとも、弟子は、それ丈の禮を執るべきものである。それが甚だしく亂れて居るのは、何より見苦しい。

然し師弟の禮のみではない。今は、一般に學生の禮儀が混亂に陷つて居る。到る處、無作法と亂雜との影を見る。而かもそれが何時矯正